

史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡

# 館城跡 V

－平成20年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書－

平成 21 年 3 月

北海道厚沢部町教育委員会

## 序 文

北海道南西部に位置する厚沢部町は、人口5千人に満たない小さな町ではありますが、川と森に囲まれた自然豊かな町であります。まちの8割以上を森林が占め、ヒノキアスナロやゴヨウマツの北限であり、トドマツの南限でもあります。多様な樹種で構成される森林は、多様な野生生物を育み、厚沢部町独特の豊かな自然景観を創りあげました。私たちの先人も、厚沢部の豊かな森とともに暮らし、その伝統や文化を築き上げてきました。このたび発掘調査を実施いたしました館城跡も、そのような町の貴重な文化財の一つであります。

館城跡は、明治元年、松前藩によって蝦夷地経営の新たな拠点として築かれたが、築城開始からわずか2ヶ月半という短期間で、旧幕府軍の攻撃を受け落城し、その後、再建されることなく現在に至っています。今では、わずかに土壘や堀、礎石、井戸跡が、当時の面影をとどめるのみとなっています。

現在の館城跡は、「館城跡公園」として町民に親しまれており、毎年5月上旬には「館城跡まつり」が開催され、多くの町民が待ちにする恒例の行事となっています。また、幕末から維新期にかけての北海道の大きな変革期を象徴する遺跡として、学術的にも高く評価されております。

昭和41年に北海道の指定史跡となり、さらに平成14年に国の史跡に指定されました。

平成17年から史跡の概要を把握するために発掘調査を継続して実施しており、また、平成18年度には保存管理計画を策定し、史跡の保存管理に努めているところであります。今後は、館城跡のより積極的な公開・活用を図っていくために、本格的な保存整備事業を実施する予定です。

今年度の発掘調査では、館城跡北東部の堀や柵列の所在を確認するとともに、「米倉跡」と言い伝えられてきた箇所において炭化米や焼土、整地層の存在を確認し、今後の整備を進める上で重要な成果を得ることができました。これらの成果が館城跡の保存整備に活用されるのみならず、調査研究における基礎資料となることを期待いたします。

最後になりますが、本事業の実施に際しまして、文化庁、北海道教育委員会をはじめとする諸機関・各氏から、多くのご指導・ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げます。

平成21年3月

厚沢部町教育委員会  
教育長 朝 倉 勝 春

## 例言

1. 本書は、厚沢部町が国庫補助（埋蔵文化財緊急調査費）を受けて、平成20年度に実施した館城跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 遺跡の地番は北海道檜山郡厚沢部町字城丘158ほかである。
3. 本書の編集は石井淳平（厚沢部町教育委員会事務局社会教育係主事・学芸員）が担当した。
4. 文責者は、特に記した者以外は石井淳平である。
5. 現場及び遺物の写真撮影は石井淳平が担当した。
6. 陶磁器の鑑定は、石井淳平が行った。
7. 陶磁器の実測・トレース及び遺構図面等のトレースは安達優子が行った。
8. 本報告書に掲載した地図及び航空写真は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の20万分の1 地勢図、5万分の1 地形図、国土地理院撮影航空写真を複製したものである。（承認番号）平20道複第100号
9. 細部地形レーザー計測は株式会社シン技術コンサルに委託した。
10. 花粉分析及び樹種同定はパレオ・ラボ株式会社に委託した。
11. 出土資料は厚沢部町教育委員会が保管する。
12. 調査にあたっては、「館城跡調査検討委員会」を組織し、指導を受けながら調査を実施した。  
委員長　藤沼邦彦（元弘前大学人文学部教授）  
副委員長　後藤元一（元札幌市立高等専門学校教授）  
委員　久保泰（松前町郷土資料館館長）  
佐藤永吉（館観光促進会会長）  
千田嘉博（奈良大学文学部准教授）  
指導・助言　市原富士夫（文化庁記念物課）  
田才雅彦（北海道教育厅文化・スポーツ課文化財調査グループ）
13. 調査にあたっては、下記の方々及び機関のご協力、ご助言をいただいた。  
阿部来（勝山市教育委員会）、五十嵐祐介（男鹿市教育委員会）、大橋康二・家田淳一（佐賀県立九州陶磁文化館）、大平愛子（飛驒市教育委員会）、齋田綾（齋田工務店）、佐藤剛（北海道埋蔵文化財センター）、佐藤雄生・闇根達人（弘前大学人文学部）、塚田直哉（上ノ国町教育委員会）、津川尚貴（若桜町教育委員会）、中井均・中野雄二（波佐見町教育委員会）、野上健紀（有田町歴史民俗資料館）、山田悟郎（北海道開拓記念館）

## 記号等の説明

1. 実測図等の縮尺は原則として以下の通りとし、全てスケールを付して図中に標示する。  
遺構図　40分の1、陶磁器・金属製品　3分の1
2. 実測図中の方位は真北を示す。
3. 土層等の色調、含有物の混在状況（面積比率）については、『新版 標準土色帖』（1996年版）に基

づき表記した。

4. 散兵壕については、平成17（2005）年の調査で自然地形と判明したため、カッコを付けて「散兵壕跡」と表記する。

# 目次 (本文・目次・表・図版)

序文

例言

記号等の説明

## <本文目次>

I章 調査の概要	1	(5) 1次整理	13
1. 調査要項	1	(6) 2次整理	13
2. 調査体制	1	(7) 保管	13
3. 調査にいたる経緯	1	3. 基本層序	14
4. 調査結果の概要	2	IV章 遺構と出土遺物	15
(1) 調査の目的	2	1. 調査区の概要と目的	15
(2) 調査区の設定	2	2. 検出遺構	15
(3) 調査の結果	2	(1) SD2	15
5. 調査の経過	2	(2) SD3	15
(1) 昭和39年度調査出土遺物整理作業	2	(3) SA2	25
(2) 調査準備等	3	(4) 「伝米倉跡」	25
(3) 現地調査	3	(5) 沢状地形	30
(4) 整理作業	3	3. 遺構出土遺物及び包含層出土遺物	30
II章 遺跡の位置と環境	5	(1) 表採・包含層出土遺物	30
1. 地理的環境	5	(2) 「伝米倉跡」出土遺物	30
(1) 位置と地形	5	(3) 沢状地形出土遺物	32
(2) 地質	5	4. 昭和39年発掘調査出土遺物	33
(3) 館城跡関連遺跡	5	(1) 昭和39年発掘調査の概要	33
2. 歴史的環境	9	(2) 昭和39年発掘調査出土遺物	33
(1) 厚沢部町の歴史的環境	9	V章 自然科学的分析	46
(2) 館城築城とその経緯	10	1. 館城跡の花粉化石	46
III章 調査の方法	12	2. 城跡出土標列木柱の樹種同定	49
1. 発掘調査基線	12	VI章 調査のまとめ	52
2. 調査の方法	12	1. 館城跡北東部の堀・柵列について	52
(1) 掘削	12	2. 「伝米倉跡」について	52
(2) 現地測量	13	3. 自然科学的分析の結果について	52
(3) 細部地形レーザー計測	13	参考文献	54
(4) 写真記録	13		

## <挿図目次>

I章

図1 館城跡遺構・調査区配置図 4

II章

図2 厚沢部町の位置と館城跡関連遺跡 6

図3 館城跡の位置と館地区の地形	7	図16 SD2・SA2平面図（6）	24
図4 指定地周辺の地形と指定範囲	8	図17 「伝米倉跡」平面図	26
Ⅲ章		図18 「伝米倉跡」西端・東端断面図	27
図5 グリッドの呼称方法	12	図19 「伝米倉跡」遺物出土状況図	28
図6 基本層序模式図	14	図20 沢状地形平面・断面図	29
IV章		図21 表探・包含層出土遺物	31
図7 第2調査区遺構配置図	16	図22 「伝米倉跡」出土遺物（1）	31
図8 3次元現況地形図（調査区全景）	17	図23 「伝米倉跡」出土遺物（2）	32
図9 3次元現況地形図（「伝米倉跡」）	18	図24 沢状地形出土遺物	32
図10 3次元現況地形図（SD2）	18	図25 昭和39年発掘調査出土遺物（1）	35
図11 SD2・SA2平面図（1）	19	図26 昭和39年発掘調査出土遺物（2）	36
図12 SD2・SA2平面図（2）	20	図27 昭和39年発掘調査出土遺物（3）	37
図13 SD2・SA2平面図（3）	21	図28 昭和39年発掘調査出土遺物（4）	38
図14 SD2・SA2平面図（4）	22	図29 昭和39年発掘調査出土遺物（5）	39
図15 SD2・SA2平面図（5）	23	図30 昭和39年発掘調査出土遺物（6）	40

#### ＜表目次＞

表1 平成20年度発掘調査包含層出土遺物一覧 （陶磁器）	41	表4 昭和39年調査概要	33
表2 平成20年度発掘調査包含層出土遺物一覧 （金属製品）	41	表5 昭和39年発掘調査出土遺物一覧 （陶磁器）	42
表3 平成20年度発掘調査沢出土遺物一覧 （陶磁器・ガラス製品）	42	表6 昭和39年発掘調査出土遺物一覧 （石製品）	44
		表7 平成20年発掘調査出土遺物集計表	44
		表8 平成20年度沢出土肥料袋等一覧	45
		表9 昭和39年発掘調査出土遺物集計表	45

#### ＜写真図版目次＞

写真図版1	59	写真図版5	63
写真1 館城跡周辺航空写真（昭和51年国土地理院撮影）		写真8 SD2南端部完掘状況（南から）	
写真図版2	60	写真9 SD2屈曲部断面（南から）	
写真2 第2調査区全景（南から）		写真図版6	64
写真図版3	61	写真10 SD2屈曲部完掘状況（西から）	
写真3 重機による表土掘削状況（南から）		写真11 SA2西端部完掘状況（東から）	
写真4 重機による表土掘削状況（南から）		写真図版7	65
写真図版4	62	写真12 SA2柱痕検出状況（南から）	
写真5 SA2及びSD3検出状況（南から）		写真13 SA2断面（南から）	
写真6 「伝米倉跡」表土掘削状況（東から）		写真14 SA2断面の柱痕検出状況（南から）	
写真7 SD2完掘状況全景（南から）		写真図版8	66
		写真15 SD2及びSA2全景（南から）	

写真図版9	67	写真38 昭和39年出土陶磁器（碗）	
写真16 「伝米倉跡」全景（北東から）		写真39 昭和39年出土陶磁器（碗・皿）	78
写真図版10	68	写真40 昭和39年出土陶磁器（皿）	
写真17 「伝米倉跡」焼土検出状況（南から）		写真図版21	79
写真18 炭化米出土状況（北東から）		写真41 昭和39年出土陶磁器（皿）	
写真19 「伝米倉跡」調査状況（北から）		写真図版22	80
写真図版11	69	写真42 昭和39年出土陶磁器（皿・鉢）	
写真20 「伝米倉跡」西端断面とSA2（西から）		写真43 昭和39年出土陶磁器（合子蓋・鉢蓋）	
写真図版12	70	写真図版23	81
写真21 「伝米倉跡」西端断面（南西から）		写真44 昭和39年出土陶磁器（レンゲ）	
写真図版13	71	写真45 昭和39年出土陶磁器（蓋付鉢・段重・瓶）	
写真22 「伝米倉跡」東端断面（南西から）		写真46 昭和39年出土陶磁器（段重）	
写真図版14	72	写真47 昭和39年出土陶磁器（香炉）	
写真23 「伝米倉跡」東端断面（東から）		写真48 昭和39年出土陶磁器（瓶）	
写真図版15	73	写真49 昭和39年出土陶磁器（碗）	
写真24 沢状地形検出状況（南東から）		写真図版24	82
写真25 沢状地形断面（南東から）		写真50 昭和39年出土陶磁器（急須蓋）	
写真図版16	74	写真51 昭和39年出土陶磁器（急須）	
写真26 表採・包含層出土陶磁器（碗・瓶）		写真52 昭和39年出土陶磁器（土瓶・土瓶蓋）	
写真27 「伝米倉跡」出土陶磁器（碗・鉢蓋）		写真53 昭和39年出土陶磁器（土瓶）	
写真28 「伝米倉跡」出土陶磁器（土瓶・土鍋蓋）		写真54 昭和39年出土陶磁器（油注・鍋）	
写真29 「伝米倉跡」出土陶磁器（甕）		写真図版25	83
写真図版17	75	写真55 昭和39年出土陶磁器（灯明皿）	
写真30 「伝米倉跡」出土金属製品（釘）		写真56 昭和39年出土陶磁器（瓶）	
写真31 「伝米倉跡」出土金属製品（鍵）		写真57 昭和39年出土陶磁器（すり鉢）	
写真図版18	76	写真58 昭和39年出土陶磁器（すり鉢）	
写真32 「伝米倉跡」出土錢貨		写真図版26	84
写真33 沢状地形出土陶磁器（左：近世磁器・右：近代磁器）		写真59 昭和39年出土陶磁器（すり鉢）	
写真34 沢状地形出土遺物（碗・ガラス瓶）		写真60 昭和39年出土陶磁器（甕）	
写真35 昭和39年出土陶磁器（碗蓋）		写真61 昭和39年出土陶石製品（砥石）	
写真図版19	77	写真図版27	85
写真36 昭和39年出土陶磁器（碗蓋）		写真62 昭和39年出土陶磁器（甕）	
写真37 昭和39年出土陶磁器（碗蓋）		写真63 昭和39年出土陶磁器（甕）	

# I 章 調査の概要

## 1. 調査要項

事業名：町内遺跡発掘調査事業

調査主体：厚沢部町教育委員会

調査地：北海道檜山郡厚沢部町字城丘158-2、159、160、169-5、376

調査面積：1,442m<sup>2</sup>（うち1,329m<sup>2</sup>につき今年度報告）

調査期間：現地調査：平成20年8月18日～平成20年10月30日

整理作業：平成20年11月4日～平成21年3月31日

## 2. 調査体制

厚沢部町教育委員会事務局

教育長 朝倉勝春

事務局長 関川 潔

事務局次長 進藤貞治

社会教育係 石井淳平（発掘担当者）

社会教育係 三戸康彰

社会教育係 船瀬洋太

社会教育係 笠原 健

発掘調査作業員

安達優子、天野信一、佐々木真弓、高橋拓也、武田睦子、谷脇政勝、長尾数利、山岸富三郎

整理作業員

安達優子

## 3. 調査にいたる経緯

館城跡は、昭和41年7月7日付北海道教育委員会広報第2945号の告示（北海道教育委員会告示第65号）により、道指定史跡となった。

昭和63年頃から、町では国の史跡指定へ向けての取り組みを進め、昭和63年9月29日～10月13日、平成元年10月2日～11月4日、平成2年10月2日～16日の3ヵ年にかけて、遺構確認調査を行った。この3ヵ年の調査では、館城跡東部の溝や柵の所在が明らかとなった。これらの成果を受け、平成13年6月25日、「史跡松前氏城跡福山城跡の追加指定の申請をし、平成14年9月20日付官報号外第208号で、「史跡松前氏城跡福山城跡館城跡」として国指定の告示（文部科学省告示第183号）がなされた。

平成15年7月に担当職員を配置し、平成17年から2ヵ年で保存管理計画を策定した。また、平成17年から、保存管理計画策定に必要な堀・土塁など館城跡の外郭線を構成する遺構及び、「散兵壕跡」の内容確認調査を実施した（厚沢部町教育委員会2007）。平成18年度の調査により、館城跡西辺の堀・柵列の所在を明らかにできたが、西辺の堀の北側延長は史跡指定地外の町道（上館城ノ岱線）下へと伸びているため、追跡調査が不可能な状況となった。

平成19年度は、地籍図及び航空写真的分析により、現在確認している西辺の堀のさらに西側に、より大きな区画が存在する可能性が浮上したことから、これまで部分的にしか発掘調査が実施されていな

かった館城跡南西部において、堀・柵列の所在確認調査を実施した。当初の予想に反し、西辺の堀の西側により大きな区画が存在する可能性は否定された。

平成20年度は南辺の堀・土塁・柵列の構造及び残存状況の確認（第1調査区113m<sup>2</sup>）と北東部の堀・柵列の所在確認（第2調査区1,329m<sup>2</sup>）を目的として調査区を設定した。併せて昭和39年の発掘調査で出土した未報告遺物の整理作業も実施した。

#### 4. 調査結果の概要（図1）

##### （1）調査の目的

平成17年から再開された館城跡の発掘調査は、館城跡の外郭線を構成する堀・土塁・柵列の所在確認を行ってきた。現在、東南二面の堀・柵列についてはほぼその所在が確認されている。しかし、西辺の堀・柵列についてはその北半が、北辺については全くその所在が確認されていない。今年度の調査では、平成元年の調査で確認された北東部を広く調査し、北辺の堀・柵列を確認することを目的として調査区を設定した。

館城跡北東部は平成元年に発掘調査が行われ、堀・柵列の所在が確認されている。M-4-dグリッドで南に屈曲した堀はL-Mライン付近で途切れおり、その延長は確認されていない。一方、柵列はさらに南下し、K-4-bで西に屈曲し、そこから約5mのところで途切れている。今年度の調査区は、平成元年の発掘調査で検出された堀・柵列の延長を確認することを目的として調査区を設定した。

##### （2）調査区の設定

調査区北側はNライン、東側は4ラインによって画した。西側は地番境界に沿って水路が延びており、この水路の上端から約50cmのクリアランスをとり、なおかつ、できるだけ直線的となるように調査区界を設定した。南側については、トドマツ等の樹木や崖地をかわして調査区を設定したことから若干いびつな形状となっているが、Kラインを南端とした。

##### （3）調査の結果

堀（SD2）は南へ屈曲した部分から約16mのところで途切れ、その延長は確認できない。柵列（SA2）は、堀よりもさらに南へ伸び、屈曲部から南へ約30mのところで西へ方向を変える。SA2の西端はそこから5mの地点である。SA2西端の延長は確認できない。

「伝米倉跡」からは表土直下から多量の炭化米を検出した。炭化米出土範囲の中心では、広範囲にわたる焼土を検出した。「伝米倉跡」周辺は、整地層と判断した厚さ約50cmの盛土がなされており、盛土（整地層）の最上面は固くしまったロームで構築される。柱穴、礎石（抜取り痕）等、建物の所在を示す遺構は確認できない。「伝米倉跡」整地層の北端はSA2の南端のラインと平行に構築されており、館城跡北辺の区画を意図した地業の可能性を想定している。

\*なお、館城跡南西部の調査を実施した第1調査区については、次年度隣接地域の調査成果と併せて報告するため割愛する。

#### 5. 調査の経過

##### （1）昭和39年度調査出土遺物整理作業

- 4月25日 整理作業員募集
- 6月2日 整理作業員雇用、整理作業開始
- 8月4日 遺物写真撮影開始
- 8月15日 実測図、トレース終了

**(2) 調査準備等**

- 5月 1日 現状変更許可申請書提出
- 6月 4日 発掘作業員雇用契約の締結、借上げ車両・借上げ仮設ハウス納品、測量作業開始
- 6月12日 現状変更許可
- 7月 4日 発掘作業員を募集
- 8月18日 調査用機材搬入
- 8月19日 基準杭打設

**(3) 現地調査**

- 8月25日 作業員契約事務及び業務説明、作業開始（第1調査区表土掘削）
- 8月26日 第2調査区重機による表土掘削
- 9月 2日 第2調査区残土除去開始
- 9月 5日 第2調査区調査区全体清掃
- 9月 9日 SD2、SA2検出
- 9月10日 第2調査区南部（「伝米倉跡」）表土掘削
- 9月19日 「伝米倉跡」表土掘削終了し遺構検出作業開始
- 9月26日 「伝米倉跡」整地層確認のため調査区東西にサブトレンチを設定
- 9月28日 発掘調査現地説明会開催（参加者27名）
- 9月29日 第2調査区沢状地形調査開始
- 10月 1日 文化庁調査官市原富士夫氏、北海道教育庁文化スポーツ課田才主査現地視察
- 10月 2日 第1回館城跡調査検討委員会現地視察
- 10月 3日 第1回館城跡調査検討委員会
- 10月 7日 第2調査区SA2西端部完掘作業
- 10月14日 細部地形レーザー計測作業開始
- 10月15日 第1調査区埋戻し作業開始
- 10月21日 第2調査区遺構及び「伝米倉跡」埋戻し作業開始
- 10月22日 調査機材洗浄、搬出
- 10月28日 第2調査区重機による埋戻し作業開始
- 10月30日 調査機材返却、埋戻し作業完了

**(4) 整理作業**

- 11月 5日 整理作業開始、遺物実測開始
- 12月30日 整理作業終了

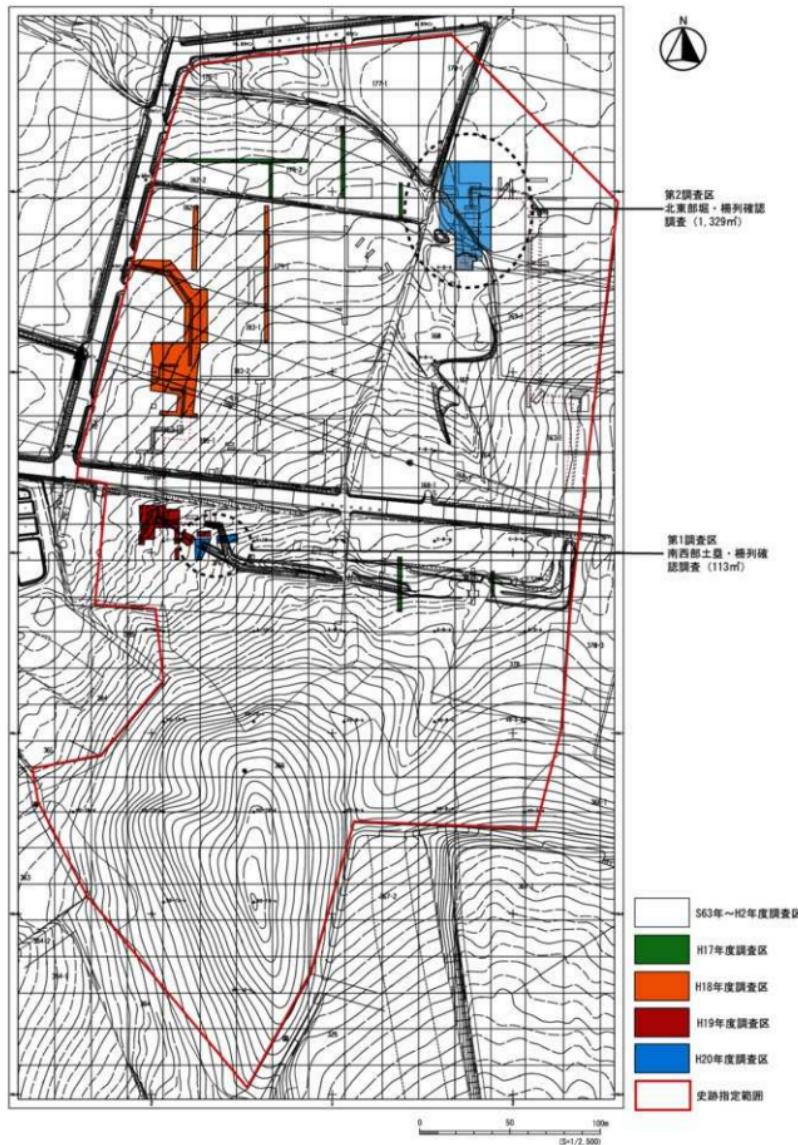


図1 館城跡遺構・調査区配置図

## Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境

#### (1) 位置と地形（図2～4、写真1）

厚沢部町は、北海道南西部渡島半島に所在し、北緯 $41^{\circ} 47' \sim 42^{\circ} 03'$ 、東経 $140^{\circ} 09' \sim 140^{\circ} 28'$ に位置する。江差町、上ノ国町、木古内町、北斗市、森町、八雲町、乙部町と界を接し、町域は厚沢部川とその支流である安野呂川、鶴川の三河川の流域にまたがり、総面積は460.42km<sup>2</sup>、東西約29km、南北約27kmの広がりをもつ。

館城の所在する館地区（厚沢部町字新栄、字当路、字中館、館町、南館町、字城丘、字富里の総称で旧大字館村にほぼ一致する地域）は、東側を日本海と太平洋との分水嶺を形成する山塊、南側及び西側を梯子山、幌内岳、五郎助岳などの標高500m級の山々、北側を字中館のなだらかな丘陵地帯に囲まれた盆地である（図3）。盆地の規模は、古佐内川と厚沢部川の合流点付近の地峡から佐助沢、泉沢の合流地点までの東西約9km、南館の市街地から館町市街地までは南北約1.5kmである。

館城跡は、厚沢部川左岸の盆地の南西、厚沢部川とその支流である糠野川の合流地点から東へ約1kmに位置する。南方から延びる舌状台地上に立地し、遺跡周辺は南から北に向かって緩やかに傾斜する。遺跡の標高は約50mで、糠野川に面した平坦面からの比高差は約20mである。遺跡の北、西、東は開け、南は比高差約30mの小丘陵（通称「丸山」）となっている。

#### (2) 地質

館地区的地質は、新第三紀に形成された厚沢部層、館層、鶴層などのシルト岩や砂岩によって形成され、さらに、これらの基盤として、古生代の松前層群と中生代の上磯層群がある。新第三紀中新世前期には、グリーン・タフ変動に伴う火山活動により福山層の堆積があり、中新世中期の大規模な海進により、檜山層群が堆積する。厚沢部層の時期に現在の向斜軸（館城跡、鶴町市街地の東側をとおり、南北方向に延びるライン）より東側の沈降に伴って、多量の堆積物が形成された。

館盆地の中央部分では軟質の館層が広く分布することから、河川の浸食の影響を強く受け、広く開析された低平地が形成されている。字新栄から館町市街地にかけては、1段の河成段丘が形成され、現河床から約45～55mの比高差をもつ。段丘堆積物は、松前層群からの供給によるチャート・砂岩・粘板岩などの礫で構成される。館町、字当路、字新栄では沖積平地が発達し、厚沢部川の氾濫原を構成する（参考文献：北海道開発庁1970、工業技術院地質調査所1975）。

#### (3) 館城跡関連遺跡（図2）

館城跡及び箱館戦争関連遺跡として、①官軍の沢、②稲倉石古戦場、③鶴村古戦場、④丸山古戦場、⑤ロクロ場、⑥開墾役所跡、⑦米揚げなどがある。①は、明治2（1869）年に新政府軍の進撃路となつた沢、②～③は館城攻防戦にともなう古戦場、⑤～⑥は安政年間に設置されたとされる開墾役所跡とそこへ荷揚げしたと伝えられる地域である。⑦は館城跡に物資を荷揚げしたと伝えられる地域である。

②稲倉石古戦場は、明治元（1868）年11月10日、館城攻略のため箱館五稜郭を出陣した旧幕府軍一聯隊と松前藩兵との戦闘が行われた古戦場である。古戦場は、現在の鶴ダム築堤付近と推測され、ダム建設地に選定されたことから明らかのように、急峻な岩山からなる地峠である。この地点を旧幕府軍に突破された場合、その背後は鶴川が開削した平野が広がり、館城までの進撃を許すこととなる。松前藩としては館城防衛上、稲倉石の守備は必須であった。そのため、松前藩は谷底の道路を封鎖し、小口径砲数門を装備した陣地を構築していた。旧幕府軍による陣地の攻略は困難とみられたが、左右の岩山から

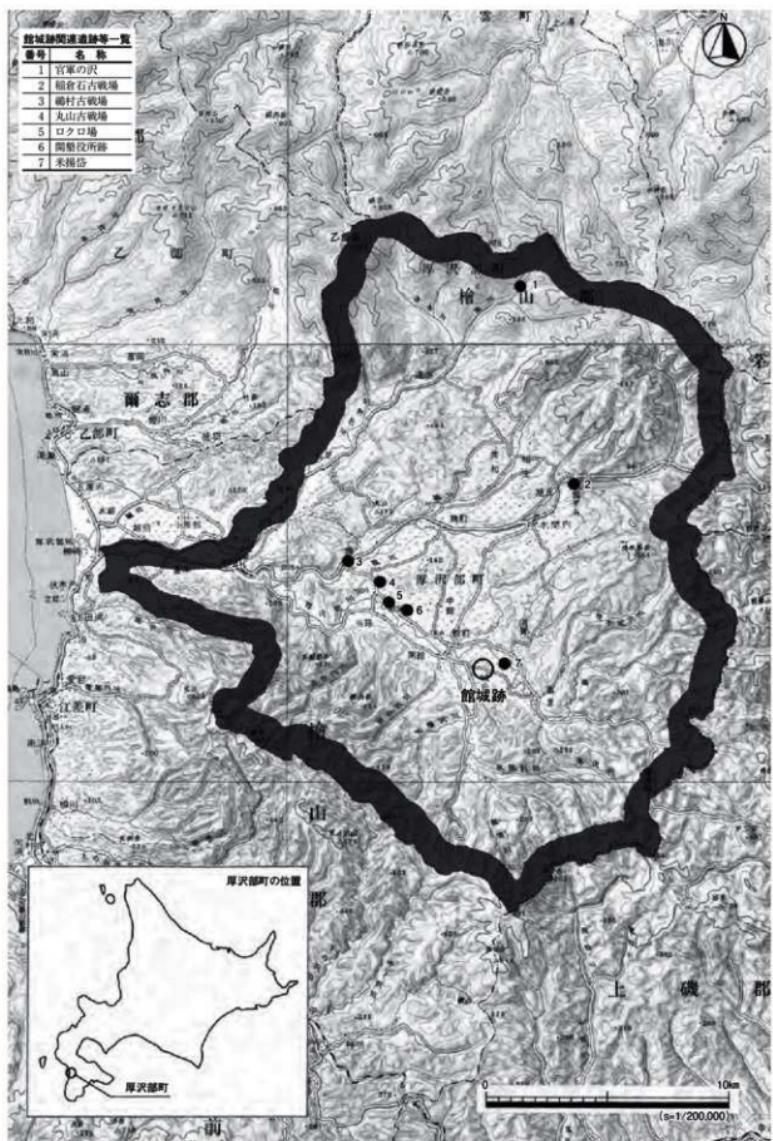


図2 厚沢部町の位置と館城跡関連遺跡（国土地理院発行20万分の1地勢図「室蘭」、「函館」を合成して加筆）

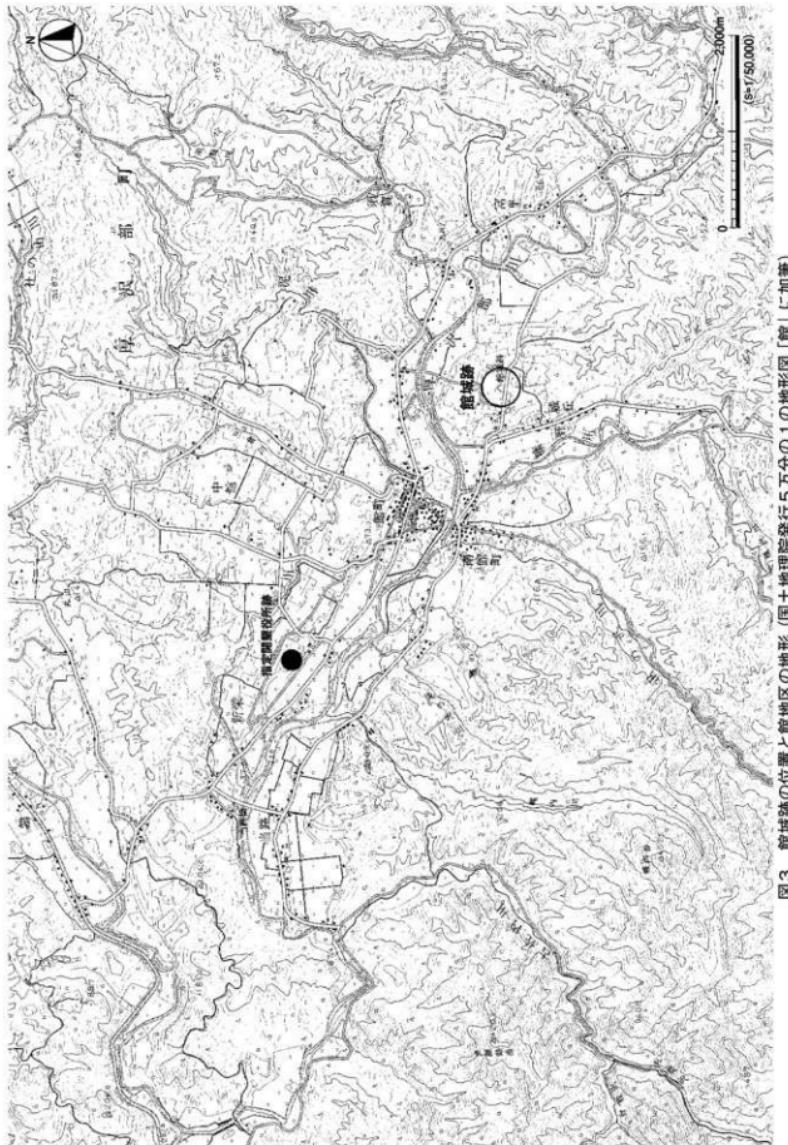


図3 館城跡の位置と前地区の地形（国土地理院発行5万分の1の地形図「館」に加筆）

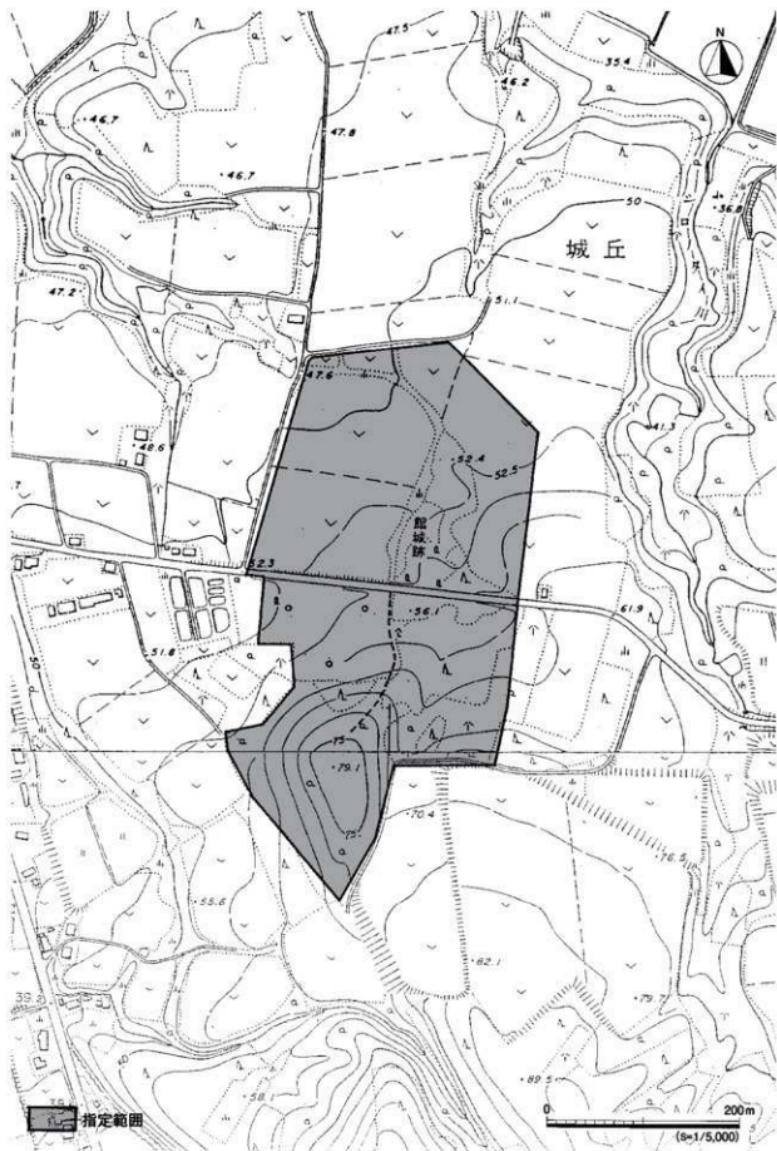


図4 指定地周辺の地形と指定範囲

狙撃されたため、支えきれずに陣地を捨てて敗走した。

③鶴村古戦場は、鶴村に宿陣した旧幕府軍の本陣を松前藩軍が強襲したことから起こった戦闘である。稻倉石で松前藩軍を敗走させた旧幕府軍は、11月13日鶴村（現字鶴）へ進軍し、ここに宿陣する。翌14日、2小隊を偵察のため館村へ派遣したところ、俄虫村（現本町・新町ほか）方面から進んできた松前藩兵が鶴村本陣を襲撃した。旧幕府軍は暫時の戦闘の後これを撃退している。

④丸山古戦場は、旧幕府軍の偵察隊と館城から進出した松前藩側の偵察隊との小競り合いである。11月14日、旧幕府軍が2小隊を偵察のため館村へ派遣したところ、鶴村から館盆地へと越える小丘陵において、松前藩兵と遭遇し、戦闘となった。この戦闘では、旧幕府軍のラッパの音に驚き、松前藩兵が敗走したことが「斐叢録」（菊地1998）などに記されているほか、松前藩側の証言からも確認されている（『櫻島－厚沢部町の歩み－』p448）。

⑤開墾役所跡は、館城築城以前に松前藩が設置したとされる役所の跡である。次節5項で詳述する。

## 2. 歴史的環境

### （1）厚沢部町の歴史的環境

文献資料における「あっさぶ」の初出は享保16（1731）年に編纂された『津軽一統誌卷第十之下』（北海道1969）で、寛文10年頃の「兵庫様御居城より松前上園え渡口覚 阿部與七郎覚書」の中に「あっさぶ 川有しやも秋共に入まじり」とある。具体的な人口などは不明であるが、現在の厚沢部町につながる集落の形成が、この頃になされつあったようである。

延宝6（1678）年には、初めて松前藩による繪伐採の記録が確認でき、「西部阿津佐不中山」で「檜樹」の伐採が行われていることが知られる（『福山秘府年歴部』卷之五 北海道庁1936）。このような松前藩主導の檜山開発の時期に前後して、袖夫など林業に携わる人々が厚沢部を訪れ、定住し、次第に現在の集落が形成されたと考えられる。

明治19年の『青江理事官訪問回答書 上』（函館市中央図書館蔵）では各集落の草分け伝承が記録されており、厚沢部川下流域では16世紀後半から17世紀の時期に陸奥国などからの移住者によって集落が形成されたことが分かる。なお、厚沢部町の伝統芸能鹿子舞は、南部地方から移り住んだ袖夫が伝えた芸能として知られる（厚沢部町教育委員会1965）。

天明5～6（1785～1786）年には、幕府による蝦夷地の大掛かりな調査が行われ、「厚沢部村 二百三十余戸、九百余人」（『蝦夷拾遺』 大友1972）の記録が残されている。この後、厚沢部川流域の戸数及び人口は、近代初期まで200戸1000人前後で推移する。

北海道内をくまなく探検し、優れた記録を数多く残した松浦武四郎は、弘化3（1846）年に厚沢部川をさかのぼり、館地区まで足を踏み入れている。記録には目名、土橋、俄虫、安野呂、赤沼、鶴、館、鷺堀などの地名が確認出来る。各部落の生業についても武四郎は聞き取りを行っており、春には鰯漁、普段は山稼ぎや炭焼き、畑作などに従事していたことを知ることが出来る。また、文献にたびたび登場する、「蝦夷村（アイヌ村）」は、土橋村（現字富榮）付近にあったとするこの時の記録を最後に、行方がわからなくなる（『再航蝦夷日誌』卷之三 吉田1970）。

明治2（1869）年7月、版籍奉還による官制改革に伴い、開拓使が設置される。同年8月に蝦夷地は北海道と改められ、11カ国86郡の行政区に区画される。松前藩は館藩と改称され、爾志、檜山、津軽、福島の4郡を領有し、厚沢部町域は引き続き館藩領内となる。明治4（1870）年の廃藩置県により、館藩は館県となり、弘前県、青森県を経て、明治5年、開拓使函館支庁の管轄下におかれることとなる。

厚沢部町域に戸長制がしかれたのは明治4（1871）年とされる（『櫻島－厚沢部町の歩み－』p247～

248)。厚沢部町域は檜山郡第21区と22区に分けられた。第22区には小黒部村、鰐川村などの旧泊村（現江差町小黒部町、鰐川町ほか）の一部が含まれる。

明治39（1906）年、第2次二級町村制施行により、俄虫、目名、土橋、赤沼、安野呂、鶴、館の各村が統合され、「厚澤部村」となった。厚澤部村の行政区域は、ほぼ現在の厚沢部町域に一致する。明治42（1909）年、前原孫蔵村長による、新聞を通じた大規模な移住民勧誘が実施され、この結果80戸が入植を希望したという（『櫻鳥－厚澤部町の歩み－』p321）。明治39年から明治42年までの四年間に、厚澤部村では戸数84戸、人口1,477人の増加がみられる。

## （2）館城築城とその経緯

### ◎13代藩主崇広の死去と徳広の藩主就任

松前藩13代藩主松前崇広は、慶応2年4月に病死する（『北門史綱』卷六 永田1991）。

崇広の死後、12代藩主の嫡子徳広が藩主に就任するものの、病弱な徳広は政務を執ることができず、藩政の中枢は、松前勘解由など崇広時代の重臣らが掌握したままであった。こうした状況に反発する反勘解由派の藩士達が、『建言書』（『慶応二丙寅十一月旧寄合中より建言書』 江差町史編集室1979）を藩主徳広に上申した。これにより松前勘解由は家老職を辞すこととなるが、反勘解由派の蠣崎民部らは脱藩の罪に問われ、また、藩政は依然として勘解由派が取りしきっていた。

### ◎正議隊のクーデター

明治元（1868）年7月28日、反勘解由派の藩士達は、『正議隊建白書』（江差町史編集室1979）を藩主徳広に提出した。『建白書』を受けた徳広は、勘解由ほか4名の重臣の登城を差し止めたが、勘解由らはこれに従わず、町役所に諸士を呼び集め密議を行なったという（『奉命日誌』江差町史編集室1979）。

7月29日、江差奉行尾見雄三が、江差在郷藩士らを率いて江差から出動し、8月1日に福山城下へ到着した（『慶応四年四月より行事見聞録』江差町史編集室1983）。尾見は、かねてから江差在郷の藩士や江差商人団を反勘解由派に引き込んでおり、江差商人団が反勘解由派の資金源となったとの見解がある（『江差町史』第六卷通説二p5）。

尾見の到着により勢力を増した正議隊は、8月1日から勘解由派の処刑を開始した。一連の処刑は、9月24日の山下雄城の処刑をもって一段落し、勘解由派の主要人物のほとんどを殺害する結果となった。

### ◎館城の築城

勘解由派に対する大量処刑により藩政の実権を手にした正議隊首脳部は、館村への築城を計画した。『奉命日誌』9月11日の項に「館村へ御築城願書壱通ハ下國東七郎ヲ以テ 太政官へ進達 壱通ハ雄三裁判所へ進達」とあり、館城築城に係る願書が、下國東七郎によって太政官及び箱館裁判所へ提出された。この築城願書に対する新政府築城許可書は11月11日付で交付されている（『江差町史』卷六通説二p36）。「報功心血」（函館市中央図書館蔵）では、「館村移城を決すると羅ども、未だ朝廷の裁可を得ざるの間は、公然たる經營を唱ふる能はず。故に勤農の名に藉りて、これが準備に從はしむるの内儀となり」とあり、鈴木本文五郎、牧村可也、今井愚一、鈴木次郎蔵、三浦巽、石塚和平が「準備委員」として「専任」された。『奉命日誌』8月28日の項には、氏家丹宮、鈴木又五郎、牧村可也、今井晦輔、鈴木次郎蔵、石塚知平、三浦巽らが勤農方として江差表へ出張を命じられ、閏川平四郎が御先手組へ取り立てられ、勘定奉行・作事方を命じられたことが記されている。すなわち、館城築城について、8月末の段階では新政府の許可が得られていないため、勤農の名目によって現地作業が開始されたと考えられる。

館城築城工事の経過は、勘定奉行兼作事方を任命された江差の豪商、閏川重孝（平四郎）が残した日記によって、うかがい知ることが出来る（江差町史編集室1981）。以下、閏川平四郎日記により、館城築城工事の様子を考える。

9月2日に館村の鈴木文五郎に宛てて連眼鏡を送ったことが記されており、この時期に、担当者が現地入りしていたことを知ることができる。9月14日には、大工四十人・木挽十人が館へ向けて出立している。9月21日には、福山から大工棟梁孝次郎はじめ、下職28名が江差へ到着し、館へ向けて出立している。

また、9月12日頃から土木作業が開始されており、9月23日現在の延べ人工数は、1525人工に達している。9月28日現在の館城普請に係る人員は、大工棟梁浜田仁兵衛、幸治郎以下、大工小頭五人、木挽2人、平大工92人、下木挽21人、土方小頭7人、土方243人、人足183人となっている。

10月14日には、建具師3人が木材と共に館へ向かっており、また、10月16日には、間似合、唐紙、玉子などの襖材材料が館へ送られており、館城普請は、内装作業へと移りつつあったことがわかる。

10月24日には、棟上げの儀式が行われたことが記されており、城内の重要な建物の棟上げが行われたことを知ることができる。10月26日には、七飯峠下での旧幕府軍と新政府軍との戦闘を受けて、三上超順や今井興之丞が、手勢を引き連れて本間にまで出張している。館城普請の最終的な結果については触れられていないが、関川重孝の築城日記もこの10月26日をもって終わっており、この前後に、館城の普請もほぼ終了していたと考えられる。

# Ⅲ章 調査の方法

## 1. 発掘調査基線（図5）

1988年～1990年の発掘調査グリッドを踏襲することとした。このグリッドは、平成14年の測量法改正以前の旧日本測地系（平面直角座標系X I系）に沿って設定された20m方眼を基本とし、南から北へ向かってA、B、C、…、東から西へ向かって0、1、2…としている。なお、Aラインより南側については記号が付されていなかったが、今回より北から南へ向かって、Z0、Y0、X0…とすることとした。0ラインより東は史跡指定範囲外となり、今回の調査では名称を付していない。この方眼は、直交するラインの交点から北西の20m平方を、その交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称し（例：F-8）、さらに10m方眼の小グリッドに分割した。小グリッドは、グリッドの基点となる交点（杭の打設位置）から反時計まわりにa、b、c、dとした（例：F-8-d）。

今年度の発掘調査に使用したグリッド杭は、平成17年に（有）安藤測量設計事務所に委託し、指定地内町有地及び指定地周辺の町道におよそ50m間隔で設置した基線杭のうち、K-5-d及びH-5-cを基準に調査区域へ打設した。

この方眼の日本測地系（平面直角座標系X I系）による平面直角座標は、

K-5-d : X=-235699.9997 Y=8049.9995

H-5-c : X=-235750.0005 Y=8050.0003 である。

測量法の改正に伴い、それまでの平面直角座標系（昭和43年建設省告示3059号）は廃止され、新たに世界測地系に基づく平面直角座標系（平成14年国土交通省告示第9号）である「日本測地系2000」が平成14年4月1日から施行されたため、基線杭設置の成果は世界測地系による平面直角座標として表示する。

世界測地系（平面直角座標X I系）による平面直角座標は、

K-5-d : X=-235443.584 Y=7756.680

H-5-c : X=-235493.584 Y=7756.681 である。

## 2. 調査の方法

### （1）掘削

「伝米倉跡」周辺を除く旧耕作地の表土掘削にはバックホウ（平積0.35m<sup>3</sup>）を使用した。バックホウによる表土掘削後、人力による残土除去及び調査区壁の清掃を行った。

「伝米倉跡」周辺は耕作等による擾乱の影響がないことから、人力による表土掘削を行った。表土直下から炭化種子及び焼土を検出したことから、表土最上層の草根部分のみスコップを使用し、それ以下の表土掘削には移植ゴテを用いた。掘削は表土（I層）にとどめ、2箇所のサブトレーナー以外、II層以下への掘削は行っていない。

遺構の掘削には移植ゴテを利用した。

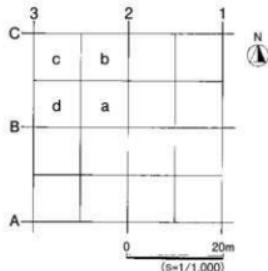


図5 グリッドの呼称方法

## (2) 現地測量

現地での実測図面は縮尺20分の1を基本とした。調査区全体遺構配置図及びその周辺の地形測量図は100分の1で作図した。

遺構の平面測量は、グリッド杭を基準として設定した簡易な水糸造方により、手作業で行った。水準測量は、水準点が設置された基線杭（K-5-d）から直接計測した。使用機材はオートレベルと5mm目盛りのアルミスタッフで、基線杭と対象との比高を直接観測して行った。

遺物の取り上げは原則として出土グリッド及び層位ごとに行い、グリッド、層位、日付を記録した。グリッドは10m平方の小グリッド単位での表示を基本とした。

## (3) 細部地形レーザー計測

「伝米倉跡」の整地層や樹列などの微細な地形データを高精度で記録し、さらに調査成果のCG表現等による活用のために、3次元レーザースキャナーによる地形測量を実施した。

測量業務は株式会社シン技術コンサルに委託し、実施した。使用機材はニコントリンブル製GS200である。

広域地形計測は10mmピッチ、遺構等の細部地形については5mmピッチのメッシュ計測を行った。

納入成果品は測量成果のほか、AdobeReader互換による3次元画像2種類とした。図8～10の「3次元現況地形図」は位置情報+画素情報を有するスキャンデータ（点群写真画像）を使用した。これを印刷品質に必要な解像度まで拡大表示し、ビューワソフト（AdobeReader）画面上で画像を切り出し、再結合したものである。

## (4) 写真記録

写真記録は調査前、調査状況、遺構等検出状況、土層断面、調査終了状況等を撮影した。撮影機材は、Mamiya RB67 PROFESSIONAL SD（中判フィルムカメラ）+ Mamiya KL65mmF4LとMamiya KL127mmF3.5L及びNikon D70S（デジタル一眼レフカメラ）+ Nikkor AiAF20mmF2.8D+ Nikkor AiAF50mmF1.4Dで、中判カメラでは、120サイズのリバーサルフィルム（フジクローム プロピア100F（RDPⅢ120））を使用した。デジタルカメラは、3008×2000ピクセルのJPEG形式で撮影・保存した。

遺物撮影も同様のシステムを使用し、中判カメラではリバーサルフィルム（フジクローム T64（ RTP120））を使用した。

写真記録は、原則として、中判カメラ、デジタルカメラともに同一カットを撮影し、デジタルカメラでは、調査状況写真や途中経過写真等を撮影し、調査記録の一助として活用した。

## (5) 1次整理

出土遺物は、調査終了後に水洗し、分類、一覧表作成、注記等の一次整理作業を行った。注記は遺跡名（TJ08）、遺構またグリッド名称、層位、取上げNo.の順に、白または黒のポスターカラーで記入し、その上にラッカーや塗布して保護した。

## (6) 2次整理

現地測量図面は、必要な訂正や変更を加え、1mm方眼紙に清書して素図を作成した。

写真記録のうち、リバーサルフィルムは、撮影順にネガアルバムに収納し、撮影時の記録（日付、撮影方向、撮影対象）をシールに記入し、ネガシートの上からそれぞれのフィルムに貼付けた。デジタルカメラ撮影分は、リバーサルフィルムと同一カット及び重要なものについてL判（12.5cm×8.7cm）に出力し、アルバムに収納した。オリジナルデータは、DVD-Rに保存した。

## (7) 保管

出土遺物は整理作業終了後に遺物登録台帳を作成し、掲載・非掲載、遺構・包含層、分類、出土グリッ

ドなどの基準で分別して収納し、さらに、厚沢部町郷土資料館収蔵品として、コンテナ、ダンボールなどの梱包単位毎に「厚沢部町郷土資料館収蔵資料台帳」に登録した。

原図・素図等の図面類、写真記録は厚沢部町教育委員会で保管する。

### 3. 基本層序（図6）

基本層序の分類は、『館城趾 遺構確認調査報告書』（厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所1989年）のそれ（以下旧層序）を踏襲した。なお、基本層序の土色、土性は、平成17年調査の南側盛土西部（第1調査区）における断面観察の結果を基準としている（厚沢部町教育委員会2007-図8参照）。

遺物包含層はI層及びII層で、III層以下は腐植土の発達しない旧石器時代以前の堆積層の可能性が高い。

I層：表土・耕作土 黒褐色（10YR2/2） 塗壤土 粘性中 堅密度堅

草の根の混じる地表面下約10cmの自然堆積層及び耕作土を総称した。旧層序I層に相当。

II-1層：黒色（10YR2/1） 塗壤土 粘性中 堅密度堅

旧層序II層に相当。

II-2層：にぶい黄橙色（10YR6/4） 砂壤土 粘性弱 堅密度軟

降下火山灰と考えられる砂質の堆積層である。遺跡周辺では、平坦地で約5cmの層厚が一般的のようである。旧層序III層に相当。

II-3層：黒褐色（10YR2/3） 塗壤土 粘性中 堅密度堅

土性はII-1層に似る。黄色味を帯びるのはII-2層の影響と推測する。旧層序IV層に相当。

II-4層：黒色（10YR2/1） 塗壤土 粘性中 堅密度堅

土性、土色ともにII-1層によく似るが、土質の粒状性がやや緻密で、土色はやや明るいように感じる。旧層序V層に相当。

III層：褐色（10YR4/6） 塗壤土 粘性中 堅密度堅 旧層序VI層に相当

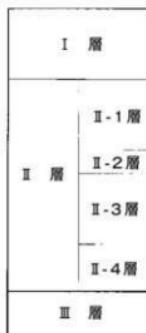


図6 基本層序模式図

## N章 遺構と出土遺物

### 1. 調査区の概要と目的（図7～10、写真2）

平成元年に厚沢部町教育委員会によって行われた発掘調査において、館城跡東辺の堀・柵列の所在を確認している。この調査では館城跡南西部から、遺構検出を開始し、順次北へ調査区を設定して堀・柵列の確認作業を行った。館城跡北東部まで堀・柵列の所在確認を進め、堀についてはL4グリッド、柵列についてはK4グリッドで端部を検出している。

北東部から西側へ延びると考えられる堀・柵列の延長は確認されていないことから、今年度の調査では館城跡北東部を広く掘開し、堀・柵列の所在確認を行った。

堀（以下SD2）、についてはL4グリッド、柵列（以下SA2）についてはK4グリッドにおいて端部を検出し、平成元年度の調査結果を追認した。

K-Lライン南側の「伝米倉跡」で厚さ約50cmの整地層を確認した。整地層の上位はⅢ層下位のロームに由来すると考えられる固くしまった粘質土が貼られる。整地層上面では焼土と炭化層が検出された。炭化層からは被然した金属製品、ガラス片、炭化米が出土した。

### 2. 検出遺構（図11～20、写真5～写真25）

#### （1）SD2（図11～13、写真5, 7, 8～10, 15）

**規模・形状：**検出面開口部で幅0.8m～1.2m、底面で幅0.6m～1.0m、検出面からの深さ0.15m～0.2mである。底面は平らで箱堀状である。壁は60°～70°の角度でやや内湾気味に立ち上がる。

**方位：**調査区東壁から屈曲部まではN—85°-W、屈曲部から南ではN—0°-W、南端から4.5mのところでわずかに方位を変えN4°-Wとなる

**土層：**図12A-A'では土層1は黒褐色土主体、土層2～5は暗褐色土及び褐色土を主体とする。いずれの土層も褐色ローム粒を一定量含む。図12B-B'では土層1～3は黒褐色土を主体とし、黄褐色ローム粒を少量含む。土層4～5は黒褐色または褐色土を主体とし、黄褐色ローム粒を多く含む。図13A-A'では土層1～7の全土層で黒褐色土を主体とし、黄褐色ローム粒を少量含む。

**出土遺物：**なし

**考察：**図12B-B'及び図13A-A'では埋戻しによる堆積と自然堆積とに大別した。図12B-B'土層1～3、図13A-A'土層1～4は下位の土層とは明確に分層可能なことから、上下層の成因が異なる可能性が高く、また図12B-B'土層1～3、図13A-A'土層1～4は黄褐色ローム粒主体とする混入物を多く含む均質な土質であることから埋戻しによる堆積と判断した。

#### （2）SD3（図14, 15、写真1, 5, 15）

**規模・形状：**検出面開口部で幅1.0m～1.2m

**方位：**N-36°-Wで直線的に沢状地形まで延びる。地番上の字城丘169-5（雑種地）と重なる。

**土層：**掘削していないため断面は確認していない。平面では黒褐色土と褐色土が確認できる。SA2を切って掘込まれる。沢状地形の上層（図20土層1～8）に切られる。

**考察：**SA2を切って掘込まれることから、館城廃絶後の遺構と判断した。沢状地形との新旧関係は不明で、SD3の埋没後、沢状地形の最上層が堆積したことが確認できる。昭和51年撮影の航空写真（写真1）にはSD3と考えられる溝状の構造が確認でき、昭和23年撮影の航空写真（厚沢部町教育委員会発掘調査報告書第6集掲載）においても不明瞭ながら同様の構造が確認できる。したがって、掘削時期は館城廃

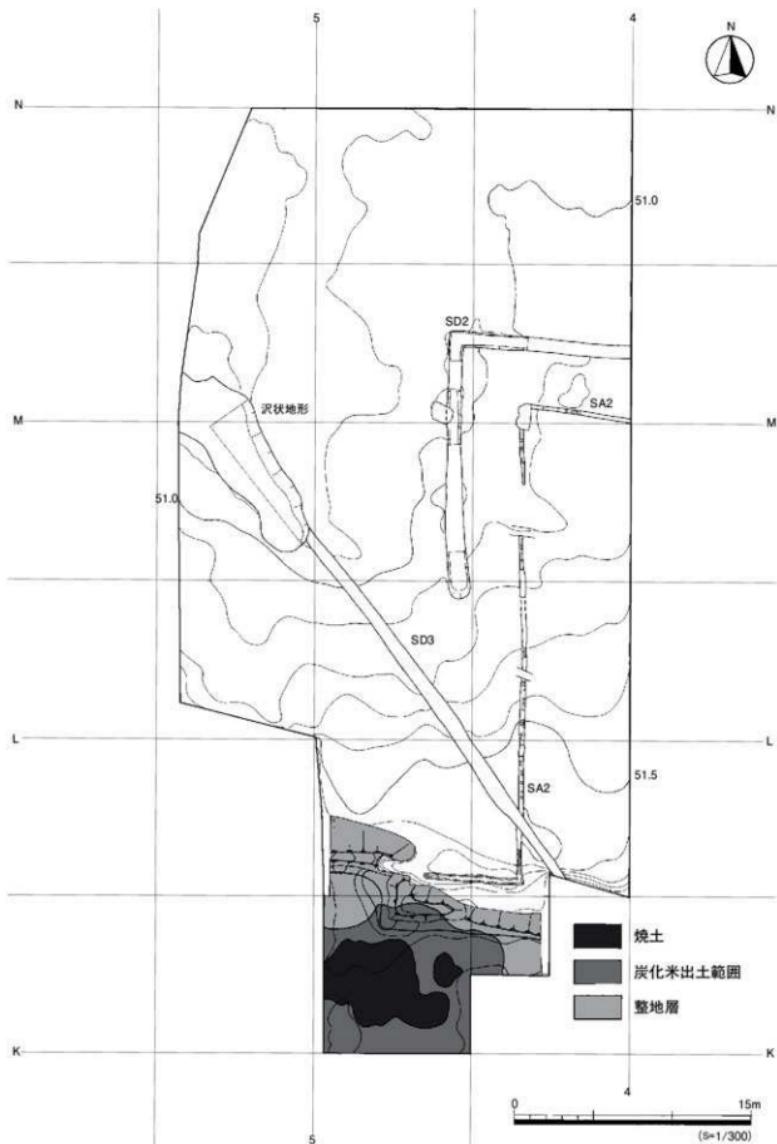


図7 第2調査区遺構配置図



図8 3次元現況地形図（調査区全景 北東から）

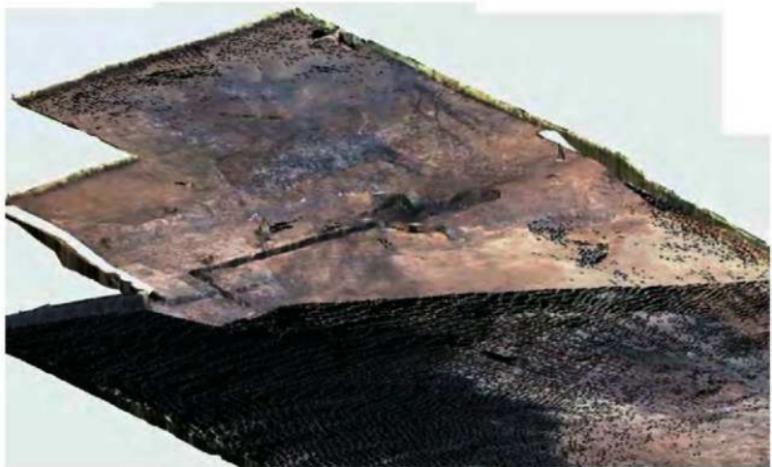


図9 3次元現況地形図（「伝米倉跡」北東から）



図10 3次元現況地形図（SD2 北東から）

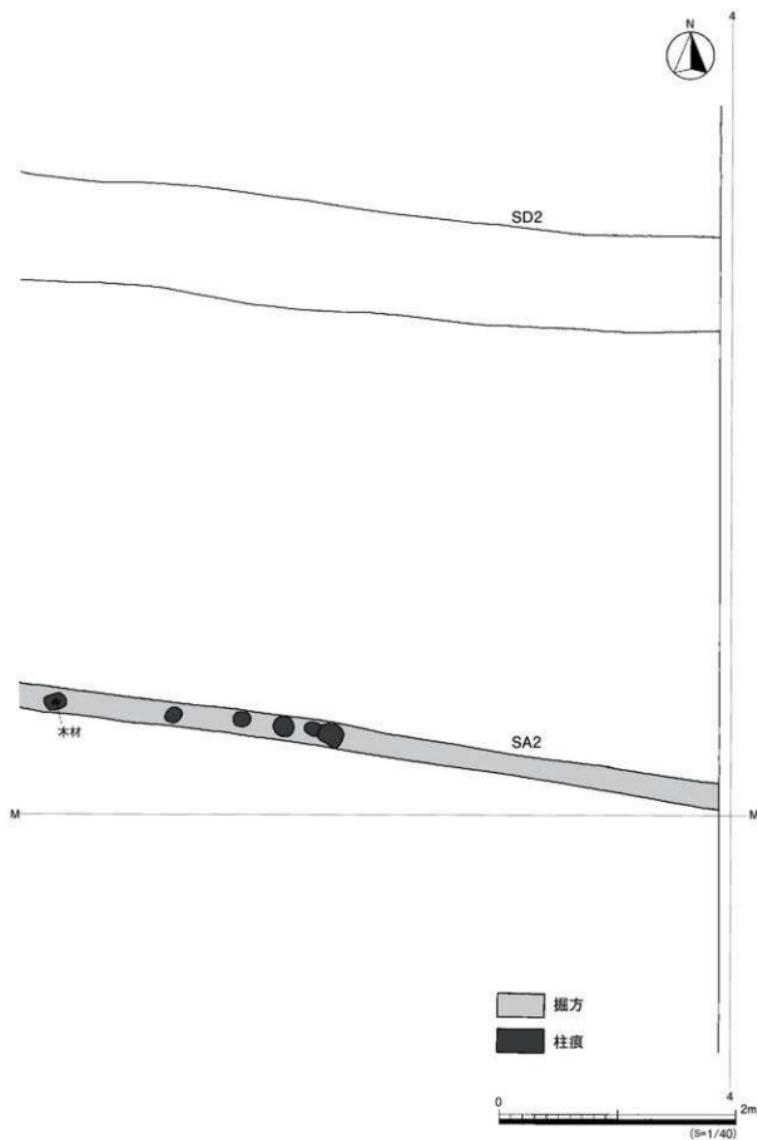


図11 SD2・SA2平面図 (1)

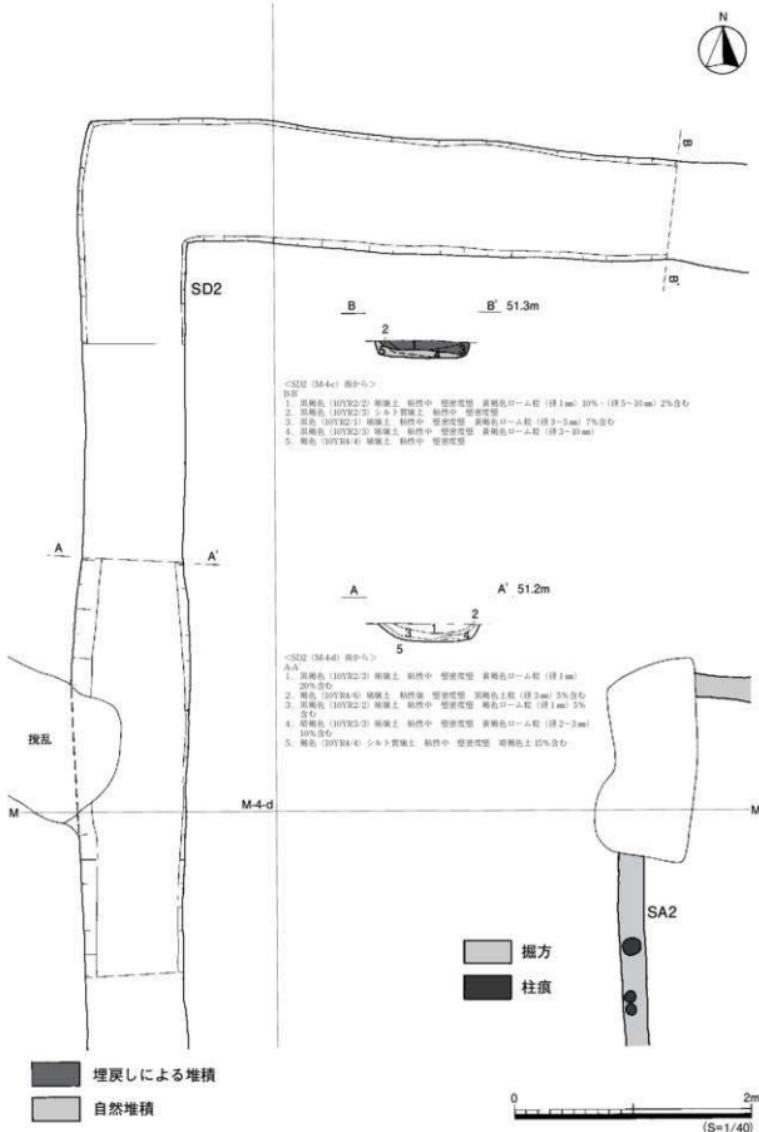


図12 SD2・SA2平面図 (2)

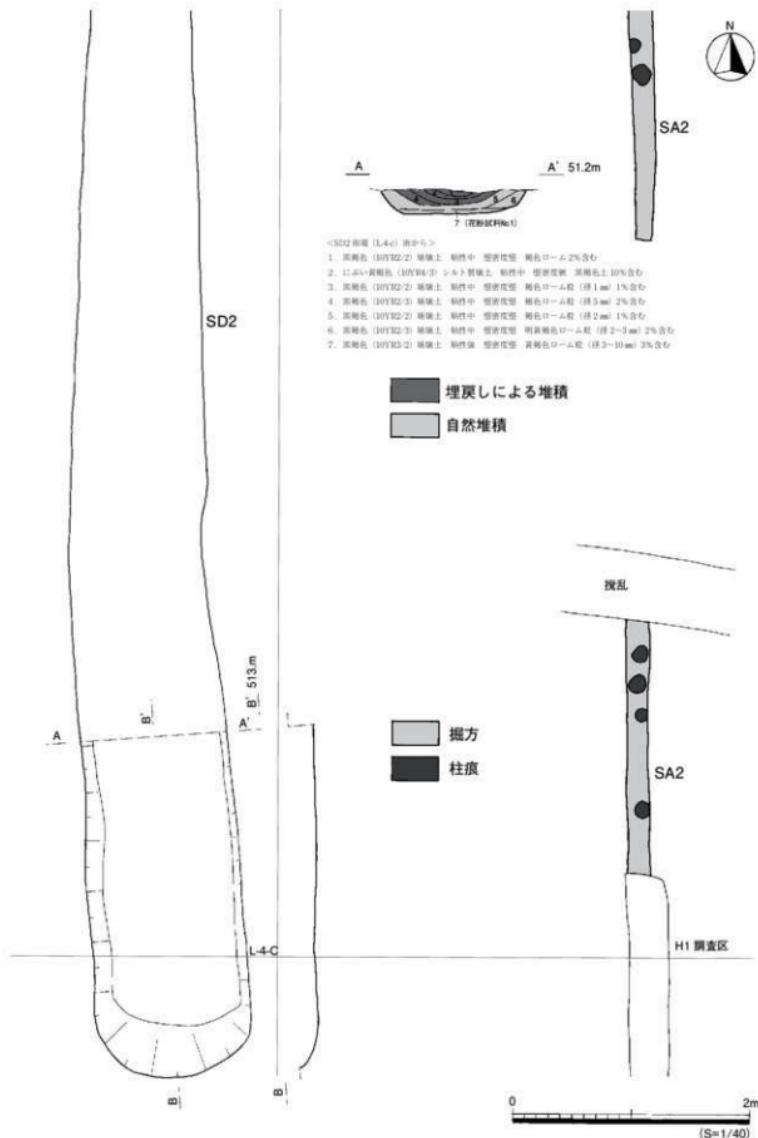


図13 SD2・SA2平面図 (3)

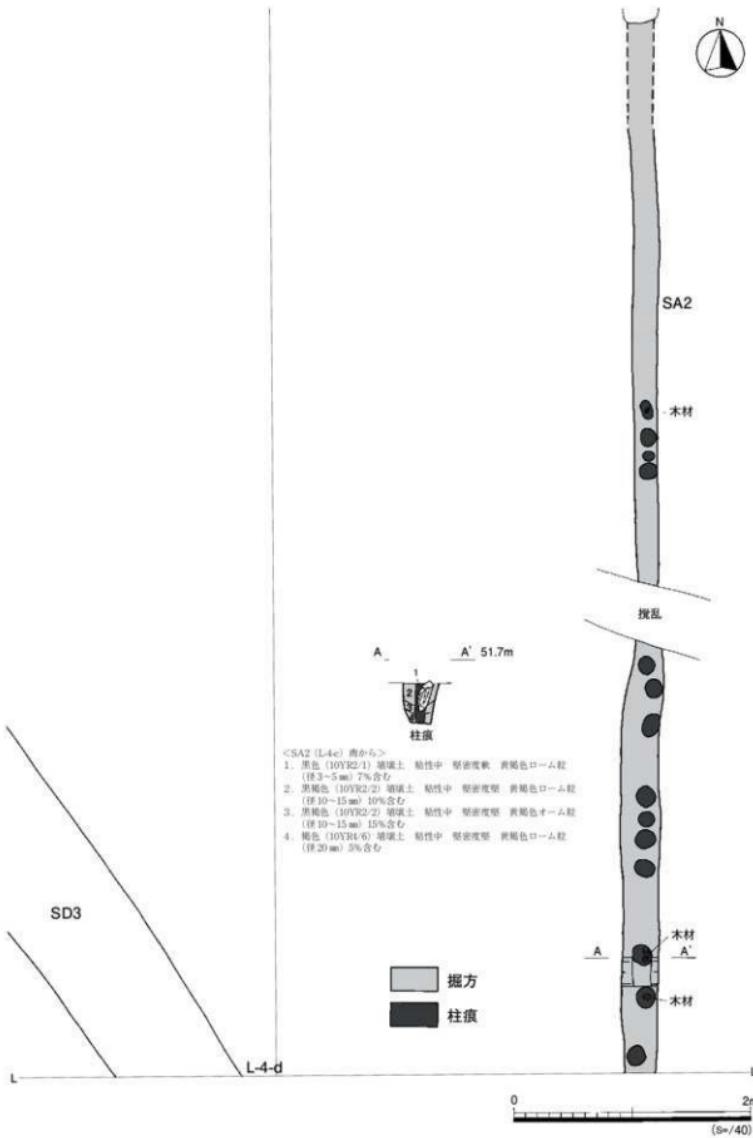
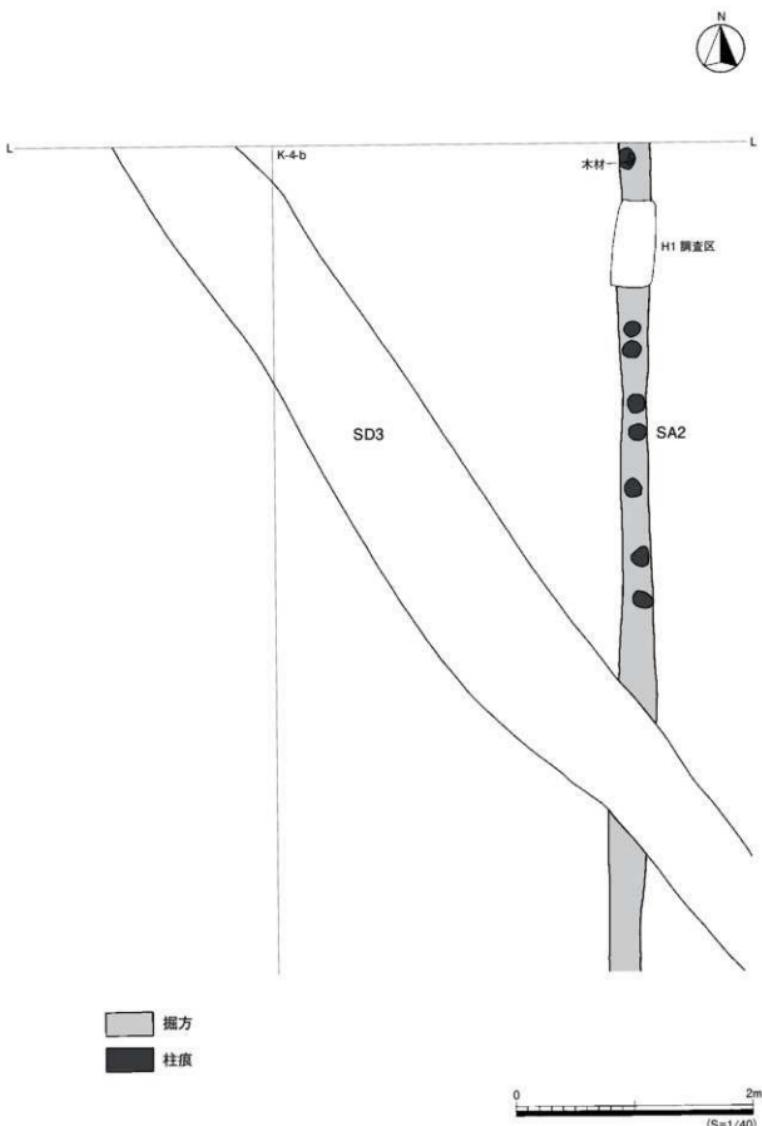


図14 SD2・SA2平面図 (4)



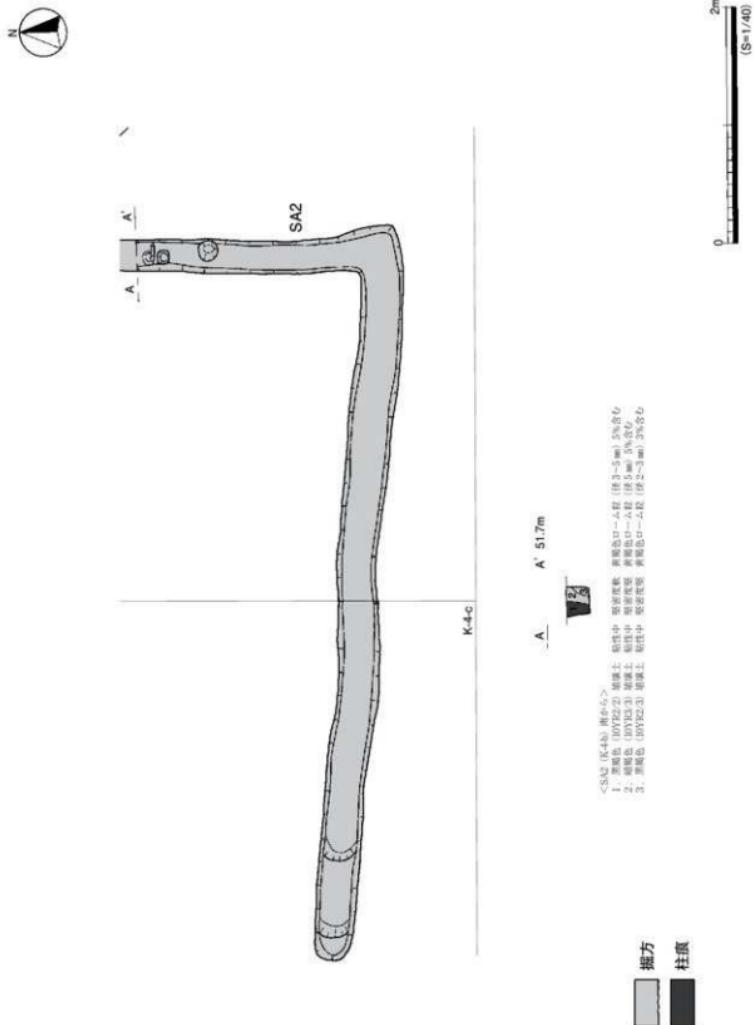


図16 SD2・SA2平面図 (6)

絶以後、遅くとも昭和23年以前と考えられる。また、昭和54年以降の堆積である沢状地形上層に切られることから、埋没時期は昭和54年以前と判断できる。

### (3) SA2(図11～16、写真5,11～15)

**規模・形状：**検出面開口部で幅0.2m、底面で幅0.15m、検出面からの深さ0.3mである。SD2の城内側真々距離で4.2mのところに位置し、SD2に並行する。柱痕の直径は約15cm、平面形は隅丸方形または円形である。坑底面を確認した箇所は一部に過ぎないが、打ち込まれた痕跡は確認していない。

**方位：**SD2の城内側真直距離で4.2mのところに位置し、並行することから、方位角についてはSD2に等しい。K-Lライン北側0.7mのところで西へ屈曲しN $88^{\circ}$ -Wとなる。

**土層：**平面観察からは、埋土は黒褐色～暗褐色土を主体とし、黄褐色土粒を含む。柱痕として図示した箇所は黒褐色土を主体とし、堅密度軟質のものである。図14A-A'は土層2～4が壌方埋土、土層1が柱痕である。柱材が残存する。図16A-A'の土層1は軟質の黒褐色土、2～3はしまりのある黒褐色土が主体である。

**出土遺物：**柱痕1基を取り上げた。腐食による変形が著しく、材の形状を特定するには至らない。

**考察：**布掘りの柵列である。西端部の延長は確認できない。

### (4) 「伝米倉跡」(図17～19、写真16～23)

**規模・形状：**厚さ約50cmの盛土による整地層を確認した。図17にて「整地層」として範囲を示した箇所は、基本層序Ⅲ層起源と思われる固い黄褐色の粘質土が貼られた範囲と、シルト質壤土を含む軟質の土層からなる。周辺の表土・包含層が軟弱なのに比べ、固い黄褐色の粘質土が貼られた整地層の範囲は軋跡が残らないほど堅さである。SA2西端の延長を平面観察により確認することはできなかった。

**炭化米：**周囲の土壤とともに黒変し、固着した炭化米を広範囲で検出した。炭化米の範囲は調査区域外へ広がっており、全体の規模は不明である。炭化米の出土レベルは地表面から深さ5cm以内である。

**焼土：**炭化米検出範囲のはば中央で検出した。

**西端断面土層(A-A')**：土層1は黒褐色土を主体とする混入物の少ない土層である。柱穴又は溝状の掘込みである。サブトレチクをはさんだ西側の壁面にも同様の掘込みの痕跡が確認できる。土層2は褐色土を主体とする土層、土層4は黒褐色土を主体とし、黄褐色ロームが混入する。整地層本体からの崩落土である。土層3～17は盛土層である。このうち土層5～6は整地層の上面を形成する土層で、土層5は黒褐色土を主体とし、土層6は純い黄褐色土を主体とする。いずれも堅密度が極めて高い。土層8～10の上位の堆積層では暗褐色～褐色の堅密度の高い土層が主体となる。土層11～17の低位の堆積層ではⅡ-2層の火山灰起源と考えられるシルト質壤土が多く含まれ、粘性と堅密度が低い土層が主体となる。

**東端断面土層(B-B')**：土層1～11が整地層の堆積層である。整地層の堆積層は土層1～7と土層8～11に大別できる。これらの堆積層の層界は非常に明瞭である。土層1～7は西端断面土層5～6に対応し、黒褐色～暗褐色土に灰黃褐色ローム粒又はブロックを多量に含む堆積層である。堅密度は高い。土層8～11はⅡ-2層起源の黄褐色砂壤土を主体、または多く混入する堆積層である。粘性と堅密度が低い。

**出土遺物：**陶磁器類では碗、鉢蓋、土瓶、鍋蓋、金属製品では釘、鍔が出土した。そのほか、寛永通宝、ガラスが出土している。遺物の出土位置は調査区南側のKラインからその北側5mの範囲に集中する。被熱したものが大半で、ガラスは発泡・変形し、原型をとどめない。

**考察：**西端断面で確認した柱穴又は溝状の掘込みは、SA2の延長上に位置することから、SA2と関連する遺構である可能性が高い。ただし、平面の観察では柱穴又は溝を確認することはできなかった。図17～19において「整地層」と標記した堆積層については、周囲の包含層や低位の盛土層と比較して明ら

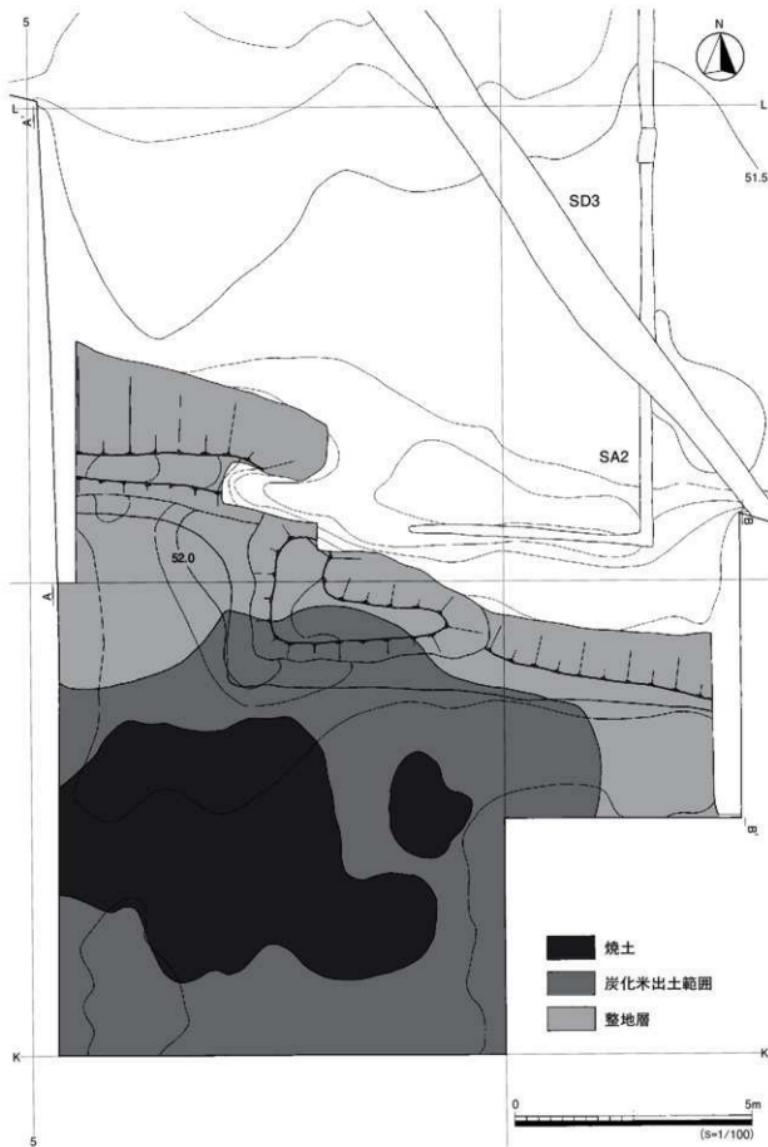


図17 「雲米倉跡」平面図

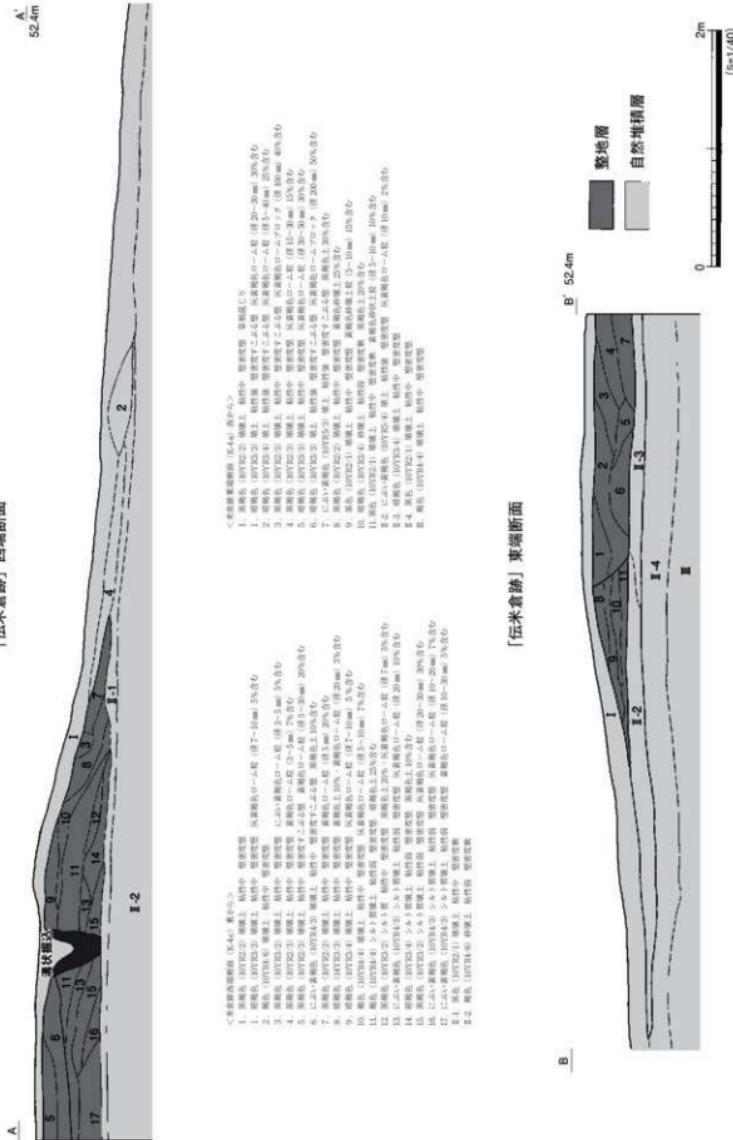


図18 「伝米倉跡」西端・東端断面図

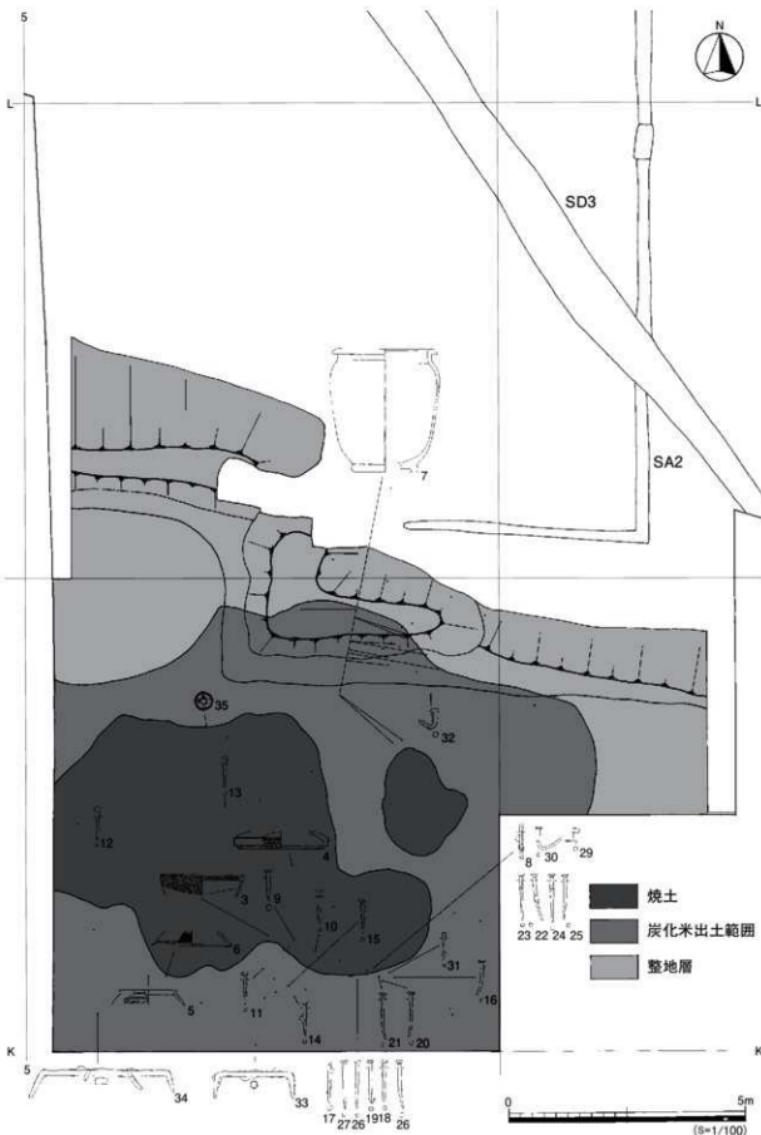


図19 「伝米倉跡」遺物出土状況図

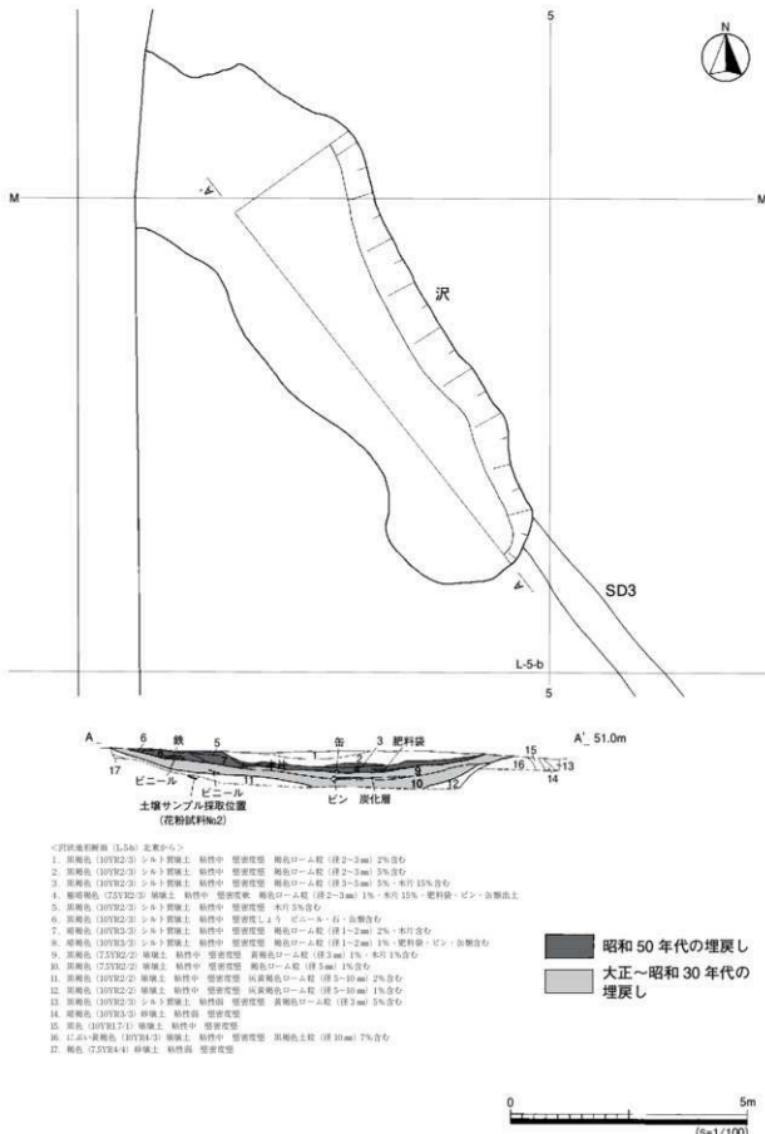


図20 澤状地形平面・断面図

かに堅密度が高く、土壤の選別や展圧などの作業により意識的に固い地面を構築したものと考える。東端断面では、南側に堅密度の高い堆積層、北側に堅密度の低い堆積層が存在し、その層界が明瞭であることから、何らかの方法で南側の堆積層と北側の堆積層を造り分けていると推測できる。出土遺物は調査区の南側に集中する。特に多く出土した釘の長さは4～6cmで平均5.2cmである。20mm厚以下の板材を固定するのに適当な長さであることから、外壁材、床板、屋根の野地板に使用された可能性が高い（齋田工務店、齋田綾氏の教示による）。

#### （5）沢状地形（図20、写真24,25）

**規模・形状：**L-5-bからM-5-aに所在する自然地形である。南東側を沢頭とし、北西方向へ傾斜する。幅約3.5m、沢頭から調査区西壁まで13mである。調査区外西側約5mのところで南北に走る水路に合流すると考えられる。

**土層：**土層1～12は埋戻しによる堆積層、土層13～16は風倒木痕である。土層17は基本層序II-2層である。埋戻しによる堆積層は、土層1～3、土層4～8、土層9～10、土層11～12に細別できる。土層1～3は黒褐色シルト質壤土を主体とする均一な堆積層で、褐色ローム粒を少量含む。土層4～8は黒褐色～暗褐色シルト質壤土を主体とし、木片、ビニール類、瓶、缶等の遺物を含む。

**出土遺物：**土層4～8では涼涼飲料水、ビールの空瓶、空缶、肥料等のビニール袋が出土している。肥料等のビニール袋には製造年月日を記したものがあり、昭和54年8月が最新年月日である。

土層9～10では幕末の陶磁器、近代陶磁器、薬瓶が出土した。ビニール類は出土していない。土層1～3、土層11～12では遺物は出土していない。

**考察：**館跡域北東部に所在することから、外郭線を構成する要素である可能性を検討するため、調査を実施した。湧水のため河床を確認することはできなかったが、自然地形と断定できる。埋戻しによる堆積層は、いずれも黒褐色～暗褐色のシルト質壤土または埴壤土を主体とし、少量の黄褐色～灰黄褐色ローム粒を含む。全体的に均一な堆積状況で、ラミナ状の堆積が確認できることから、短期間のうちに埋戻されたと判断する。埋没の年代は土層4～8で出土したビニール袋の年代から昭和54年8月以降と断定できる。土層9～10は出土したガラス瓶の陽刻が左書きとなっていることから、昭和20年代以降と考えられる。また、ビニール製品が出土していないことから、農作業用品におけるビニール製品が一般的となる昭和40年代以前と推測する。

### 3. 遺構出土遺物及び包含層出土遺物（図22～24、写真26～34）

#### （1）表探・包含層出土遺物（図21、写真26）

1はG-7-aで採集した資料である。磁器碗で、外面草花文、口縁内面に鋸歯状文がめぐる。

2は包含層出土の関西系陶器瓶である。

#### （2）「伝米倉跡」出土遺物（図22,23、写真27～32）

3～35は「伝米倉跡」出土の遺物である。

3～4は磁器である。3は丸碗で、外面に蛸唐草文、口縁部内面に花菱文がめぐる。4は鉢蓋で外面に榆垣文がめぐる。

5～6は関西系陶器である。5は土瓶、6は鍋蓋である。

7は肥前系と考えられる陶器甕である。頸部が短く直立し、口縁端部が「5」の字状に引き出される。

8～34は鉄製品である。多くの個体に被熱痕がみられる。

8～32は釘である。32のみ太く、用途が異なるものである。8～31はいずれも釘頭を巻くように折曲げるものである。33、34は鎌である。33は角形、34は平形で2カ所に釘を通す穴があり、釘が残存する。



図21 表採・包含層出土遺物

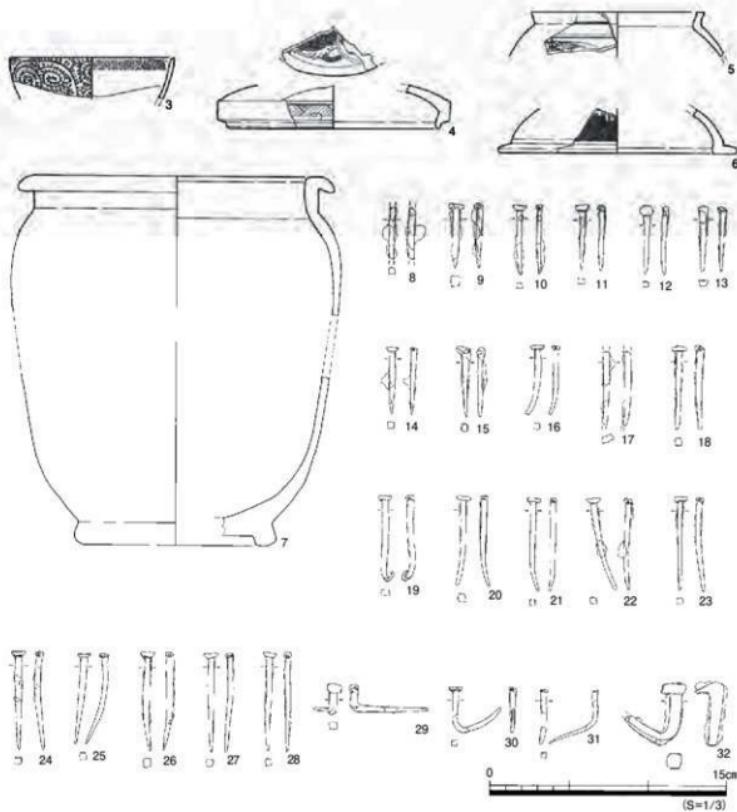


図22 「伝米倉跡」出土遺物 (1)

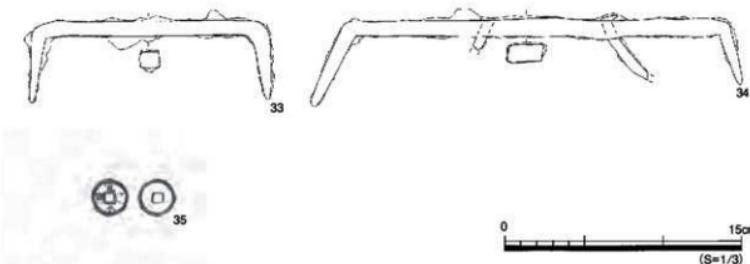


図23 「傳米倉跡」出土遺物（2）

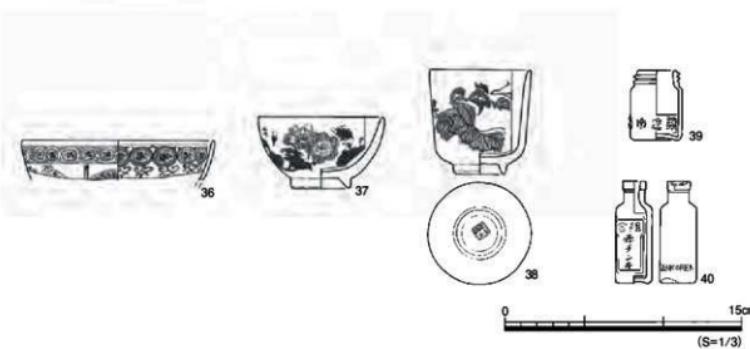


図24 沢状地形出土遺物

35は寛永通宝である。「寶」字の「貝」が「ハ字」となっていることから、寛文8（1668）年以降鋳造の「新寛永通宝」である。

### （3）沢状地形出土遺物（図24、写真33,34）

36～38は磁器碗で、36のみ幕末、37、38は近代の所産である。36は丸碗で、口縁部内外面に四方櫛文がめぐる。外面は竹が確認できる。37は丸碗で、厚手、小形のものである。外面に桜花が描かれる。38は筒形碗で、外面に蔓草、高台内に「明治陶器」の印判。

39、40はガラス瓶である。39は無色透明で、外面に「みゆき染」の陽刻がほどこされ、染料容器と推測される。40は半透明茶色で、外面に右書きで「組合」、縦書きで「赤チンキ」、外面下部に「ZENKOREN」の陽刻が施される。外傷薬瓶である。

#### 4. 昭和39年発掘調査出土遺物（図25～30、写真35～63）

##### （1）昭和39年発掘調査の概要

本発掘調査に係る本報告は管見の範囲では確認できず、調査図面等についても厚沢部町教育委員会において保管しているものは『館城址現況測図』のみである。

この調査の公式的な記録は、北海道教育委員会による『文化財概要報告書』（北海道教育委員会1963）と大場利夫による『日本考古学年報17』（日本考古学協会1969）である。前者では地域住民の聞き取り調査と現地踏査による現状把握が中心となっており、後者は昭和38年10月14日～15日の2日間の調査報告である。調査箇所は、「本丸」の礎石の所在と配列、「賄部屋」の礎石の所在とその配列、「米倉跡」、「火薬庫」または「神社跡」とされる地点、「本丸」の井戸、「武士部屋」の井戸とされるが、調査地点や調査方法は記されていない。

厚沢部町教育委員会の保管する文書により確認した調査内容は下表のとおりである。掘削箇所、面積、深度の分かることのできる資料は確認できないが、掘削が行われた可能性があるのは、10月14～15日に行われた「本丸」礎石調査及び「米倉跡」炭化米分布範囲調査と、10月20日に行われた「賄部屋跡」礎石調査及び井戸発掘調査である。出土遺物の保管されていたビニール袋には「井戸出土」と明記された遺物のほか、層位又は調査区名称と思われる記号を付したものがあることから、井戸跡の発掘調査のほか、一定面積の表土または包含層を掘削する調査が行われた可能性が高い。

表4 昭和39年調査概要

調査期日	調査者	作業名称	作業内容
昭和38年8月6日		予備調査及び打ち合わせ会	古記録類の所在について 古老の聞き取り調査
昭和39年10月3～4日	町史編纂員新明清ほか7名	館城跡現況図作成実測作業	現地踏査及び平板測量による実測図作成（『館城址現況測図』）
昭和39年10月14～15日	北海道大学大場利夫ほか16名	北海道文化財専門委員調査	大場利夫による「本丸」礎石の調査、「米倉跡」炭化米分布範囲調査
昭和39年10月19日	町職員久保田武雄ほか1名	本丸発掘礎石原寸調査	町職員による礎石写真撮影等
昭和39年10月20日	町史編纂員新明清ほか14名	賄部屋跡礎石及び井戸発掘調査	「賄部屋跡」の礎石調査及び井戸発掘

##### （2）昭和39年発掘調査出土遺物（図25～30、写真35～63）

41～95は磁器である。

41～50は碗蓋で、いずれも口径9cm前後である。41、42、44、45は外面草花文、口縁部内面に鋸歯状文がめぐり、見込みに「寿」字が書かれる。43は外面草花文、口縁部内面に波状文がめぐる。46は外面花文、口縁部内面に鋸歯状文がめぐり、見込みに「寿」字が書かれる。47は外面花文、見込みに「寿」字が書かれる。48は外面に蔓草文、高台内に落款風の記号、口縁部内面に連続する「Z」字状文様。49、50は外面草葉文、見込みに「寿」字が書かれる。

51～62は碗で、口径は8cm前後のものと、10cm前後のものがある。口縁部の残存するもののうち59、60が丸碗、62が筒型碗である以外は全て端反碗である。51は外面源氏香文、口唇部に銷袖を施す。

52は無文。53、54は外面四方に桜花文、見込みに記号が書かれる。55は外面草花文、口縁部内面に鋸歯状文がめぐる。56は外面草葉文、口縁部内面に3本1単位の連続する短直線がめぐる。57は外面花文地に窓付きの花文、口縁部内面に雷文がめぐる。58は他の個体より胎土の色調がくすむ暗灰色となるもので、口縁部内面に連弧文がめぐる。59、60は丸碗で、外面に微塵唐草文を施し、60は口縁部内面に菱形文がめぐる。61は外面花唐草文、草葉文、草文が施され、見込みに円形の連弧文と字文を描く。62は筒型碗で、外面草花文と半菊花文、口縁部内面に雷文がめぐる。

63は角形の型押皿で、内面四方に紗綾形文、見込みに桜花文を陽刻する。

64～71は型押し成形の輪花皿である。64は被熱痕のある個体で、見込みに雲文を陽刻する。65は外面唐草文、内面に蛸唐草文を施す。66、70、71は外面唐草文、内面に微塵唐草文を施す。67～69は外面無文、内面の施文は不明である。

72～82は皿である。72～74、77は高台内を蛇目状に露胎し、見込みに山水を描く。75は外面唐草文、内面に微塵唐草文を施す。76は見込みに花器と菊花を描く。78は高台内蛇目状に露胎し、外面に山水、見込みに菊花、花弁、石垣を描く。79は高台内蛇目状に露胎し中心に「成化年製」、外面唐草文、内面蛸唐草文、見込みに菱形花文を円形に配し、その内側に松竹梅を描く。80～82は角皿で、80は見込草葉文、見込外縁を柳葉文で縁取り。81は外面花文、見込は雷文で縁取り、内側に山水を描く。82は見込を雷文で縁取り、内側に窓、窓内に椿を描く。

83～85は鉢である。83は円形の鉢で、外面山水、口縁端部繪垣文、内面に菊文を施す。84は角形で外面窓内に青海波、内面窓内に牡丹と花文、窓間に花弁と唐草を赤絵で施し、花弁は金彩とする。85は外面唐草文、内面微塵唐草文、花文を施す。

86は合子蓋で外面菊花文と花弁を施す。

87、88は鉢蓋で、88は外面に家屋と花唐草文を描く。

89はレンゲで、底面露胎、内面花唐草文を陽刻する。

90は焼接痕を有する蓋付鉢で外面家屋を描く。

91、92は段重の基段で、91は外面に微塵唐草文と方形の中に縱棒を引く連続文を施す。92は外面を区画し、山水、梅、家屋と竹などを描き、下位には連弁がめぐる。

93は角形の香炉で外面には梅が描かれる。

94、95は瓶で、胎土はいずれもくすんだ暗灰色である。94は小形の瓶で外面区画間に連続する縱縞を引く。95は外面に筆を描く。

96～109は関西系陶器である。96、97は碗で、内外面鉄釉が施され、外面大部下半に連続して圓線を引く。98は急須蓋で無釉、暗茶褐色の胎土である。99は急須で被熱痕がある。100～104は土瓶、土瓶蓋である。103と104は銅綠釉が施され、被熱痕がある。対になる個体である。105、106は油注、107は鍋である。108は灯明皿、109は瓶で、外面灰白色の長石釉、内面鉄釉が施される。

110～117は陶器である。

110～114は陶器製すり鉢でいずれも全面に錫釉が施され、錫目は隙間なく施される。110、112は口縁端部を折返して肥厚するもの、111は口縁端部が玉縁状となるものである。

115～117は陶器製甕である。115は底部内面にトチン痕が残る。116は外面褐色を帯びた釉調で内面には錫釉が施される。117の頭部は直立し、口縁部は外反し内側に折返して肥厚する。内面に当具痕が残る。

118は砂岩製の研石である。

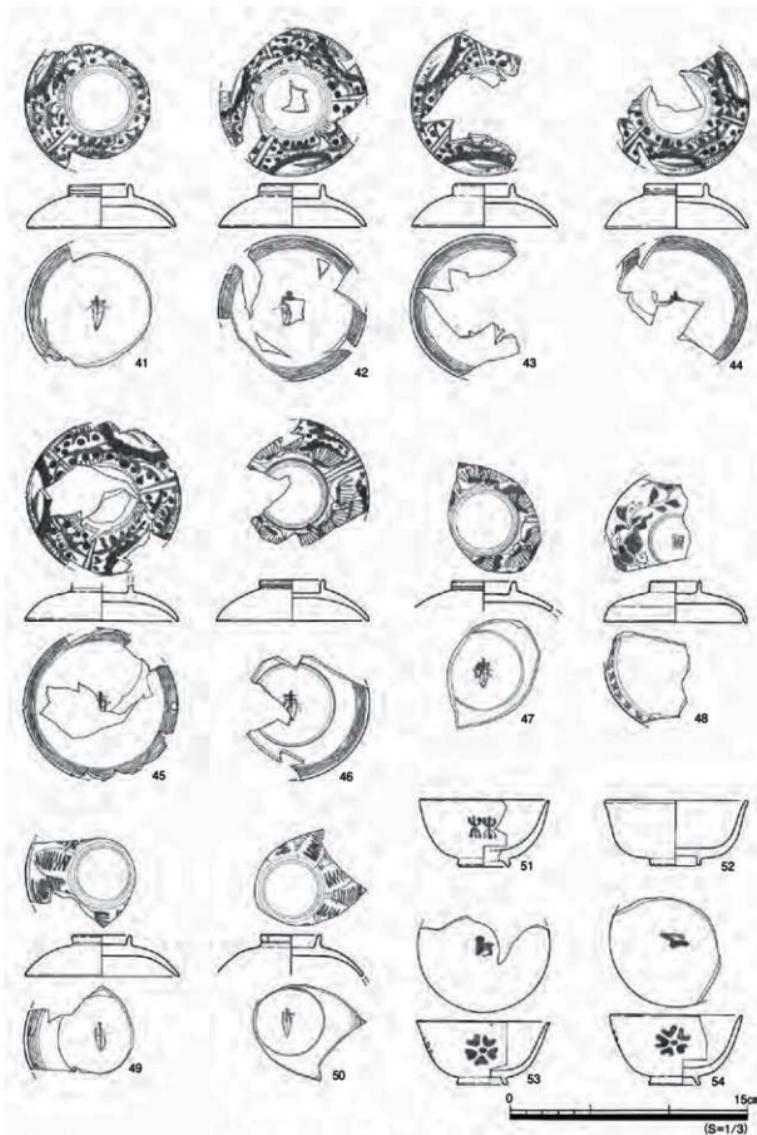


図25 昭和39年発掘調査出土遺物（1）



図26 昭和39年発掘調査出土遺物 (2)

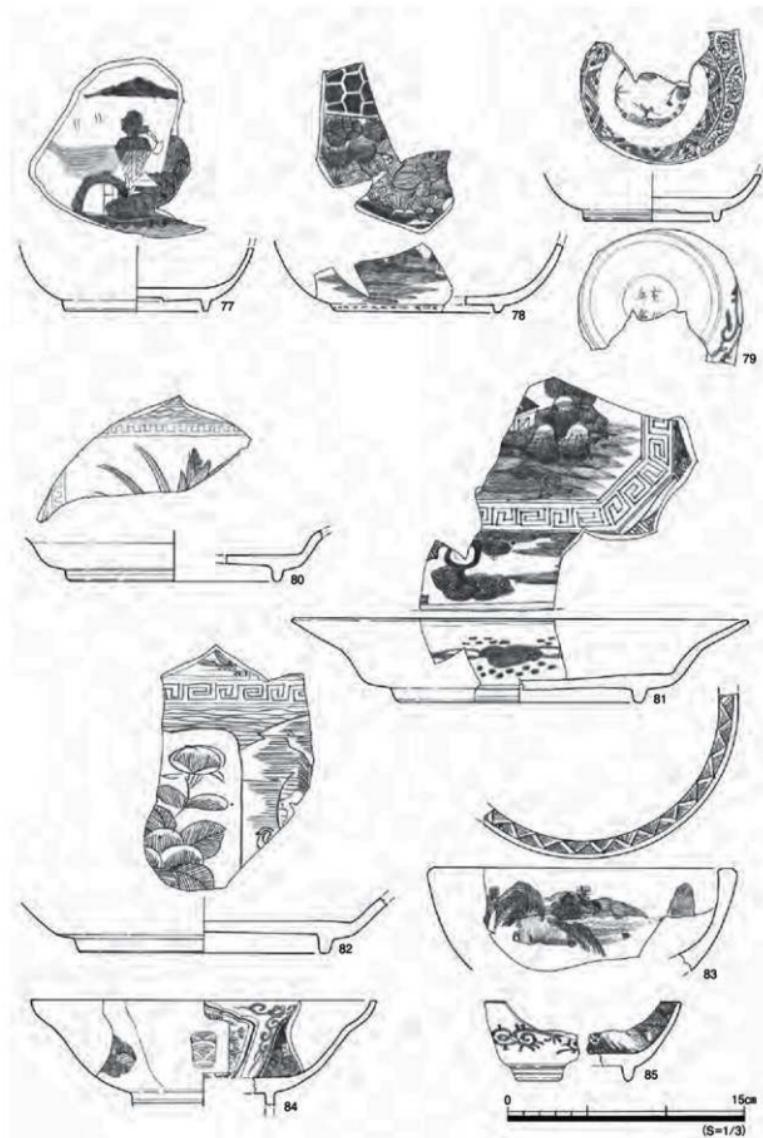


図27 昭和39年発掘調査出土遺物 (3)

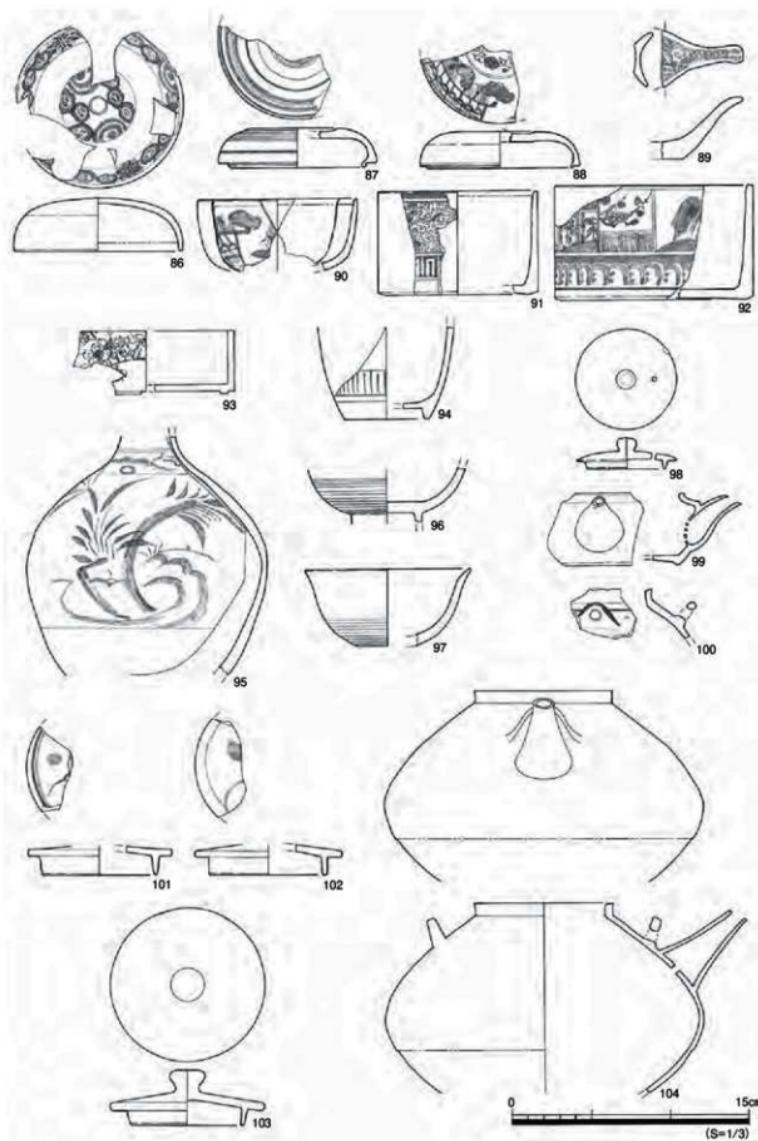


図28 昭和39年発掘調査出土遺物 (4)

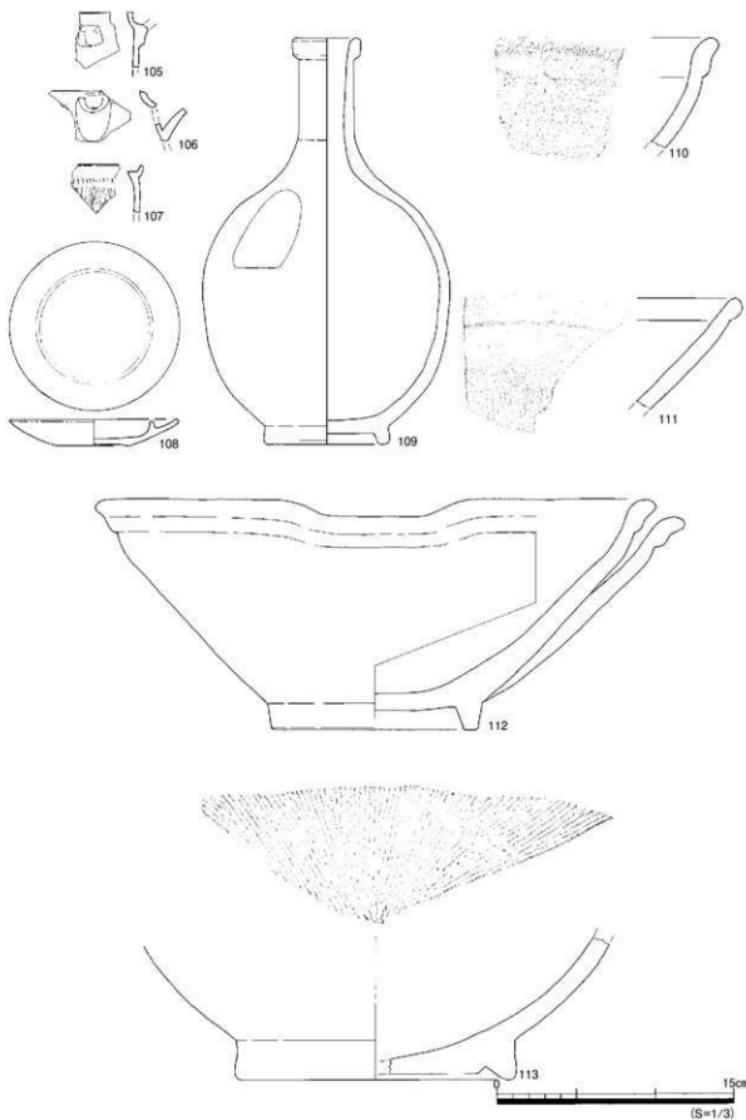


図29 昭和39年発掘調査出土遺物（5）

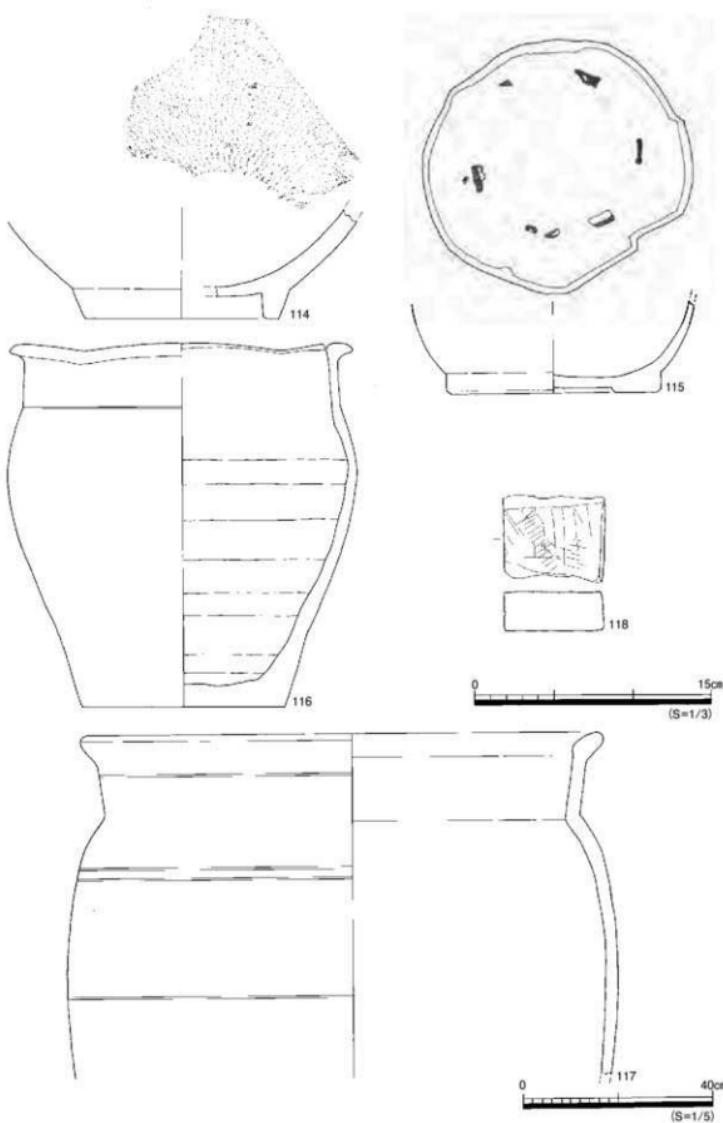


図30 昭和39年発掘調査出土遺物 (6)

表1 平成20年度発掘調査包含層出土遺物一覧（陶磁器）

掲載番号	写真	グリッド	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考	取上No.
1	26	G-7-a	表採	磁器	碗	9.8			外面草花文、 内面鋸歯状文	
2	26	L-5-a	I層	関西系陶器	瓶					
3	27	K-4-d	SE上面	磁器	碗	10.0			外面蜻唐草文、 内面花菱文	
4	27	K-4-d	SE上面	磁器	鉢蓋	13.0			外面楕垣文	28
5	28	K-4-d	SE上面	関西系陶器	土瓶	10.5				50
6	28	K-4-d	SE上面	関西系陶器	鍋蓋		14.6			49
7	29	K-4-d	I層	陶器	壺	18.0	11.0	23.0		5
		K-4-d	I層							63
		K-4-d	SE上面							8
		K-4-d	SE上面							11
		K-4-d	SE上面							14
		K-4-d	SE上面							16
		K-4-d	SE上面							17
		K-4-d	SE上面							20
		K-4-d	SE上面							21
		K-4-d	M-2上							64
		沢	1層							

表2 平成20年度発掘調査包含層出土遺物一覧（金属製品）

掲載番号	写真	グリッド	層位	種類	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考	取上No.
8	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘		0.4	0.4		40
9	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	3.95	0.95	0.53		33
10	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	4.3	0.9	0.4		32
11	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	4.07	0.92	0.52		48
12	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	4.22	0.84	0.41		27
13	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	4	0.69	0.58		26
14	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	4.18	0.75	0.5		43
15	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	4.38	0.91	0.45		44
16	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	4.37	1.17	0.49		37
17	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘					41
18	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	5.23	0.89	0.62		41
19	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	5.4	1.01	0.5		41
20	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	5.7	0.91	0.55		39
21	30	K-4-d	I層	鉄製品	釘	5.88	0.85	0.42		2
22	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	5.73	0.92	0.48		40
23	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	5.9	0.85	0.52		40
24	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	6.18	0.88	0.52		40
25	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	5.68	0.99	0.6		40
26	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	6.19	0.9	0.57		41
27	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	6.22	0.86	0.51		41
28	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	6.21	0.81	0.55		41
29	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	1.92	0.9	0.52		40
30	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	2.79	0.8	0.47		40
31	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	3.42	0.5	0.4		38
32	30	K-4-d	SE上面	鉄製品	釘	3.87	1.51	1.83		19
33	31	K-4-d	SE上面	鉄製品	鍔	15.16	5.19	1.22		51
34	31	K-4-d	SE上面	鉄製品	鍔	26.85	5.35	2.25		53
35	32	K-4-d	SE上面	銭	寛永通宝	2.38	2.35		新寛永通宝	23

表3 平成20年度発掘調査出土遺物一覧（陶磁器・ガラス製品）

掲載番号	写真	遺構名	層位	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考	取上No.
36	33	沢	2層	磁器	碗	12.0			口縁内外面四方 襷？、外面竹	
37	33	沢	2層	磁器	碗	7.7	3.5	4.5	近代、外面桜花	
38	34	沢	2層	磁器	筒型碗				外面蔓草、高台 内「明治陶器」 印判	
39	34	沢	2層	ガラス製品	染料瓶	2.3	2.7	4.4	外面「みゆき染」 陽刻	
40	34	沢	2層	ガラス製品	薬瓶	1.3	2.0	6.4	外面「組合」、 「赤チンギ」、 「ZENKOREN」 陽刻	

表5 昭和39年発掘調査出土遺物一覧（陶磁器）

掲載番号	写真	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
41	35	磁器	碗蓋	9.2	3.7	2.7	外面草花文、内面鋸齒状文、内面見 込に「寿」字
42	37	磁器	碗蓋	9.0	3.8	2.7	外面草花文、内面鋸齒状文、内面見 込に「寿」字
43	37	磁器	碗蓋	9.0	3.7	2.7	外面草花文、内面波状文
44	37	磁器	碗蓋	8.8	3.7	2.8	外面草花文、内面鋸齒状文、内面見 込に「寿」字
45	37	磁器	碗蓋	9.4			外面草花文、内面鋸齒状文、内面見 込に「寿」字
46	37	磁器	碗蓋	9.4	3.8	2.6	外面花文、内面鋸齒状文、内面見込 に「寿」字
47	35	磁器	碗蓋		3.8		外面花文、内面見込に「寿」字
48	37	磁器	碗蓋	8.9	3.0	2.6	外面蔓草文、高台内に落款風の記号、 内面連続する「Z」字状文様
49	35	磁器	碗蓋	9.5	3.5	2.6	外面草葉文、内面見込に「寿」字
50	36	磁器	碗蓋		3.6		外面草葉文、内面見込に「寿」字
51	38	磁器	碗	8.0	3.0	4.2	外面源氏香文、口唇部銷釉
52	39	磁器	碗	8.8	3.0	4.1	
53	38	磁器	碗	8.2	3.0	4.0	外面桜花文、見込に記号
54	38	磁器	碗	8.2	3.0	4.4	外面桜花文、見込に記号
55	39	磁器	碗	10.4			外面草花文、内面鋸齒状文
56	38	磁器	碗	11.0			外面草葉文
57	38	磁器	碗	10.0	3.9	5.8	外面花文、内面雷文、 内面連弧文
58	39	磁器	碗	11.0			
59	38	磁器	碗	9.9	3.5	4.4	外面微塵唐草文
60	39	磁器	碗	8.5	2.9	4.4	外面微塵唐草文、内面菱形文
61	39	磁器	碗		3.6		外面花唐草文、草葉文、草文、見込 に連弧文、文字
62	39	磁器	筒型碗	7.2			外面草花と半菊花、内面雷文
63	39	磁器	型押皿	7.6	3.4	2.3	内面紗綾形文、見込桜花文
64	39	磁器	輪花皿	9.7	4.7	2.2	見込雲文、被熟痕
65	39	磁器	輪花皿	10.8			外面唐草文、内面銷唐草文
66	39	磁器	輪花皿	11.3	6.1	3.0	外面唐草文、内面微塵唐草文
67	39	磁器	輪花皿	13.8			
68	40	磁器	輪花皿	14.4			
69	40	磁器	輪花皿	13.8			
70	40	磁器	輪花皿	15.0			外面唐草文、内面微塵唐草文
71	40	磁器	輪花皿	19.6			外面唐草文、内面微塵唐草文

掲載番号	写真	種類	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備考
72	40	磁器	皿		8.8		見込山水、高台内蛇の目状に露胎
73	40	磁器	皿		10.0		見込山水、高台内蛇の目状に露胎
74	41	磁器	皿		8.6		見込山水、高台内蛇の目状に露胎
75	41	磁器	皿	27.4	18.0	4.0	外面唐草文、内面微塵唐草文
76	41	磁器	皿		11.0		内面花器と菊花
77	41	磁器	皿		8.6		見込山水、外面高台内蛇の目状に露胎
78	41	磁器	皿		10.0		外面山水、内面菊花、花弁、石垣、高台内露胎
79	41	磁器	皿		8.2		外面唐草文、高台内蛇の目状露胎し「成化年製」、内面銷唐草文、菱形花纹、見込松、花弁
80	41	磁器	皿		12.8		見込草葉、見込外縁を柳衛文
81	42	磁器	皿	28.0	15.0	5.3	外面花文、見込山水、見込外縁を雷文
82	42	磁器	皿		15.0		見込椿、見込外縁を雷文
83	42	磁器	鉢	18.0			外面山水、口縁端部楕垣文、内面菊花文
84	42	磁器	鉢	21.0			外面窓青海波、内面窓牡丹及び花文、窓間の花弁(梅花?)と唐草は赤絵、花弁金彩
85		磁器	鉢			5.0	外面唐草文、内面微塵唐草・花文
86	43	磁器	合子蓋	10.3		3.4	外面菊花文、花弁
87	43	磁器	鉢蓋	8.4		2.5	
88	43	磁器	鉢蓋	9.0		2.3	外面家屋、花卉草
89	44	磁器	レンゲ				内面花唐草、底面露胎
90	45	磁器	蓋付鉢	9.8			外面家屋、焼接ぎ痕
91	45	磁器	段重	9.8	8.8	6.5	外面微塵唐草文、下段は方形の中に縱棒の連續文
92	46	磁器	段重	12.0	11.6	7.2	基段、外面山水、梅、建物と竹、下位に連弁
93	47	磁器	角形香炉			4.0	外面梅
94	45	磁器	瓶		5.0		外面区画間に連續縱縞
95	48	磁器	瓶				外面笛
96	49	関西系陶器	碗				内外面鉄釉
97	49	関西系陶器	碗	10.2			内外面鉄釉
98	50	関西系陶器	急須蓋	4.0		2.0	
99	51	関西系陶器	急須			4.5	2次被熱
100	52	関西系陶器	土瓶				
101	52	関西系陶器	土瓶蓋	7.0			
102	52	関西系陶器	土瓶蓋	7.0			
103	52	関西系陶器	土瓶蓋	6.8		3.5	外面銅綠釉、被熱
104	53	関西系陶器	土瓶	8.4			外面銅綠釉、被熱
105	54	関西系陶器	油注				外面灰釉、内面下半露胎
106	54	関西系陶器	油注				内外面灰釉、2次被熱
107	54	関西系陶器	鍋				外面銹釉
108	55	関西系陶器	灯明皿	10.4	4.6	1.7	外面露胎、内面灰釉
109	56	関西系陶器	瓶	3.8	7.4	25.4	外面灰釉、内面鉄釉
110	57	陶器	すり鉢				外面銹釉、口縁端部折返して肥厚
111	57	陶器	すり鉢				外面銹釉、口縁端部玉縁状
112	59	陶器	すり鉢	33.6	12.0	14.5	外面銹釉、口縁端部折返して肥厚片口
113	58	陶器	すり鉢		17.0		内外面銹釉
114	58	陶器	すり鉢		12.0		内外面銹釉

掲載番号	写真	種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
115	60	陶器	甕		12.8		外面鋸袖、底部内面にトチ痕
116	62	陶器	甕	20.0	12.0	22.7	外面褐色袖、内面鋸袖、底部露胎
117	63	陶器	甕	54.0			外面鋸袖

表6 昭和39年発掘調査出土遺物一覧(石製品)

掲載番号	写真	種類	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
118	61	石製品	砥石		6.3	2.5	

表7 平成20年発掘調査出土遺物集計表

種別	器種	法量	点数
磁器			13
	碗		5
		10cm	2
		不明	3
	輪花皿		3
	皿		1
	蓋類		1
	瓶		1
	不明		2
関西系陶器			2
	土瓶		1
	鍋蓋		1
陶器			57
	すり鉢		1
	甕		56
金属製品			72
	釘		40
	鍵		3
	不明		29
錢貨			1
	寛永通宝		1
その他			118
	ガラス片		118
総計			263

表8 平成20年度沢出土肥料袋等一覧

種類	年代	備考
ダストカーマー（セントラル硝子）		
硫酸加磷安苦土入り（北東化成）		
くみあい尿素硝加磷安（三井東庄化学）	S46.3	製造年月
苦土マンガンほう素尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S53.4	製造年月
複合磷加安苦土入り（北海道日産化学）	S53.9	製造年月
苦土尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S54.8	製造年月
苦土尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S54.8	製造年月
苦土尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S54.8	製造年月
苦土入り複合磷加安（北海道日産化学）	S53.3	製造年月
苦土マンガンほう素尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S53.4	製造年月
苦土マンガンほう素尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S53.6	製造年月
苦土マンガンほう素尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S53.3	製造年月
苦土尿素入り複合硝加磷安（三井東庄化学）	S . 9	製造年月
苦土尿素入り複合硝加磷安（三井東庄化学）	S . 9	製造年月
苦土尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S54.8	製造年月
苦土マンガンほう素尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S53.6	製造年月
苦土マンガンほう素尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S53.4	製造年月
20.0倍成りん肥（日之出化学工業）	S48.11	製造年月
苦土尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）		
苦土マンガンほう素尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S53.3	製造年月
苦土マンガンほう素尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S53.6	製造年月
苦土入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S . 8	製造年月
苦土マンガンほう素尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）		
苦土入り複合硝加磷安（北東化成）		
苦土マンガンほう素尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S53.9	製造年月
苦土マンガンほう素尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S53.6	製造年月
苦土尿素入り複合硝加磷安（三井東庄化学）	S . 9	製造年月
苦土尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S54.8	製造年月
アレチッド（DNBPA除草剤）（ヘスキト～北海三共）	S56.10	使用期限
グリーンエムダイファー（殺菌剤）（北海三共）		
苦土マンガンほう素尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S53.3	製造年月
硫酸加里（全農）		
苦土マンガンほう素尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）		
苦土マンガンほう素尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）		
苦土マンガンほう素尿素入り複合硝加磷安（北海道日産化学）	S53.8	製造年月

表9 昭和39年発掘調査  
出土遺物集計表

種別	器種	法量	点数
磁器			777
	碗蓋		50
	碗		226
	6cm		4
	8cm		31
	10cm		61
	12cm		55
	不明		75
	筒型碗		1
	型押皿		10
	輪花皿		191
	皿		161
	鉢		32
	蓋付鉢		16
	段重		3
	合子		3
	蓋類		20
	香炉・火入れ		4
	瓶		12
	不明		48
関西系陶器			193
	碗		5
	土瓶蓋		4
	土瓶		59
	急須蓋		2
	急須		1
	油注		2
	灯明皿		26
	鍋		8
	鉢		23
	瓶		56
	不明		7
陶器			252
	すり鉢		14
	瓶		4
	甕		234
	総計		1222

# V章 自然科学的分析

## 1. 館城跡の花粉化石

鈴木 茂（パレオ・ラボ）

### （1）はじめに

館城跡において行われた発掘調査で、明治元年（1868年）に築城された館城跡に伴う堀および館城跡北東部城外に位置する沢状地形より土壤試料が採取された。以下にこの土壤試料を用いて行った花粉分析の結果を示し、遺跡周辺の古植生について検討した。

### （2）試料と分析方法

試料は堀（SD2）の底面より採取された試料1と沢状地形の底面より採取された試料2の2試料である。各試料について、試料1は土壤化が進んだ黒色砂質シルトで、細根が点在している。試料2はやや土壤化した黒色粘土で、砂が少し混入している。時期について、試料1は落城後～大正から昭和初期、試料2は築城よりさほどさかのばらない時期と考えられている。花粉分析はこれら2試料について以下のような手順に従って行った。

試料（湿重約5g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

### （3）分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉22、草本花粉15、形態分類を含むシダ植物胞子3の総計40である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表1に、それらの分布を図1に示した。なお分布図の樹木花粉は樹木花粉総数を、草本花粉・シダ植物胞子は全花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また図や表においてハイフン（-）で結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示しており、バラ科の花粉には樹木起源と草本起源のものとがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

検査の結果、樹木花粉の検出数が少なく、保存状態も全体に悪い結果であった。その中、コナラ属コナラ亜属が最も多く検出され、出現率は30%を越えている。次いでハンノキ属が多く、出現率は10%を越えている。その他ではブナ属が10%前後、カバノキ属とトチノキ属が5%前後の出現率を示しており、マツ属の複複管束亜属（アカマツ、クロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）や単複管束亜属（ヒメコマツ、キタゴヨウなどのいわゆるゴヨウマツ類）、クマシテ属-アサダ属、ニレ属-ケヤキ属、シナノキ属、ウコギ科などが5%弱を示している。草本類ではヨモギ属が最も多く、出現率は20～30%を示している。次いで17%前後のイネ科が多く、タンボボ亜科も試料1では約10%を示している。その他では1個体ずつではあるがソバ属が得られている。

### （4）遺跡周辺の古植生

試料の時期は築城された明治元年から昭和初期の期間と推測され、この時期の館城跡周辺丘陵部ではコナラ亜属やハンノキ属、カバノキ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属、トチノキ属などが生育する落葉広葉樹林が成立していたと推測される。さらにSD2周辺にはウコギ科が、沢状地形近辺にはクマシテ属-

アサダ属、カエデ属、シナノキ属が生育していたとみられる。一方、草本植生としてはイネ科、ヨモギ属、シダ植物を中心にSD2ではタンボボ亜科が、沢状地形近辺ではキンボウゲ科やセリ科が目立つ存在であったとみられる。

なお、ソバ属が1個体ずつではあるが検出されており、試料採取地点周辺においてソバが栽培されていた可能性が推察される。

表1 植物花粉化石一覧表

科名	学名	1	2
<b>裸子</b>			
モミ属	<i>Abies</i>	1	-
トクサ属	<i>Picea</i>	1	1
マツ科常緑樹木モミ属	<i>Pines subgen. Mipyxylon</i>	3	2
マツ科常緑樹木モミ属	<i>Pines subgen. Diploxylon</i>	3	4
マツ科(チリ)	<i>Pines (Tilia)</i>	4	4
スギ	<i>Cryptomeria japonica D. Don</i>	4	2
イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科	T. C.	3	1
クルミ属	<i>Pinus</i>	1	1
クルミ属	<i>Juglans</i>	1	1
クワリ科アザマ属	<i>Carpinus + Castanea</i>	1	4
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	3
カバノキ属	<i>Alnus</i>	1	15
ブナ属	<i>Fagus</i>	8	12
コナラ属カラマツ属	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	31	37
ニホンカシラマツ属	<i>Quercus</i>	9	-
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	1	-
セナジキ属	<i>Ilex</i>	1	1
カエデ属	<i>Acer</i>	4	4
トクサ属	<i>Astomias</i>	6	5
ブナ属	<i>Vitis</i>	1	1
シナノキ属	<i>Tilia</i>	1	1
ウコギ科	<i>Malvaceae</i>	7	1
<b>被子植物</b>			
イヌ科	<i>Gramineae</i>	89	89
イヌカリ属	<i>Oryzaceae</i>	5	3
ソバ科	<i>Polygonaceae sect. Raymistris</i>	-	3
アオイ科	<i>Araliaceae</i>	1	1
テチロ科	<i>Chloranthaceae</i>	1	2
カシワ科	<i>Caryophyllaceae</i>	1	2
カシワツヅリ科	<i>Thelypteridaceae</i>	3	-
他のカシワツヅリ科	other Rosaceae	-	19
アズキ科	<i>Crotonaceae</i>	1	1
ユキシタケ科近似種	cf. Basellaceae	1	1
バクメ	<i>Basellaceae</i>	1	-
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	1	8
セリ科	<i>Artemisia</i>	16	185
他のセリ科	other Tubuliflorae	6	5
タンポポ科	Liguliflorae	54	11
<b>シダ植物</b>			
ゼンマイ科	<i>Drimoschaceae</i>	3	3
モクシ科	<i>Motaceae</i>	68	88
三尖杉科	<i>Triptiliaceae</i>	87	109
<b>被子植物花粉</b>			
被子植物	<i>Arborescent pollen</i>	107	119
裸子植物	<i>Nonarboreal pollen</i>	137	241
シダ植物孢子	<i>Sporites</i>	135	158
花粉・孢子総数	Total Pollen & Spores	553	554
<b>不明花粉</b>			
	<i>Unknown pollen</i>	16	11

○ T. - C. は Taxodiaceae-Cephaelanthaceae-Cupressaceaeを示す

草木花粉

草木花粉・シダ植物孢子

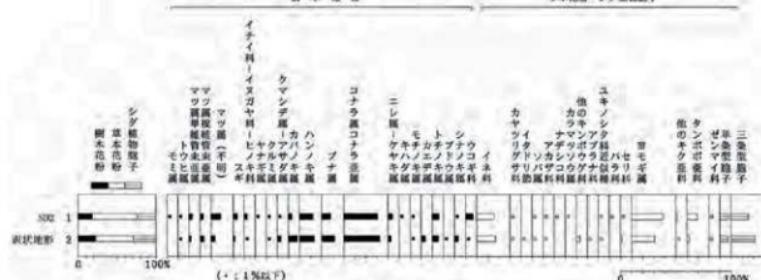
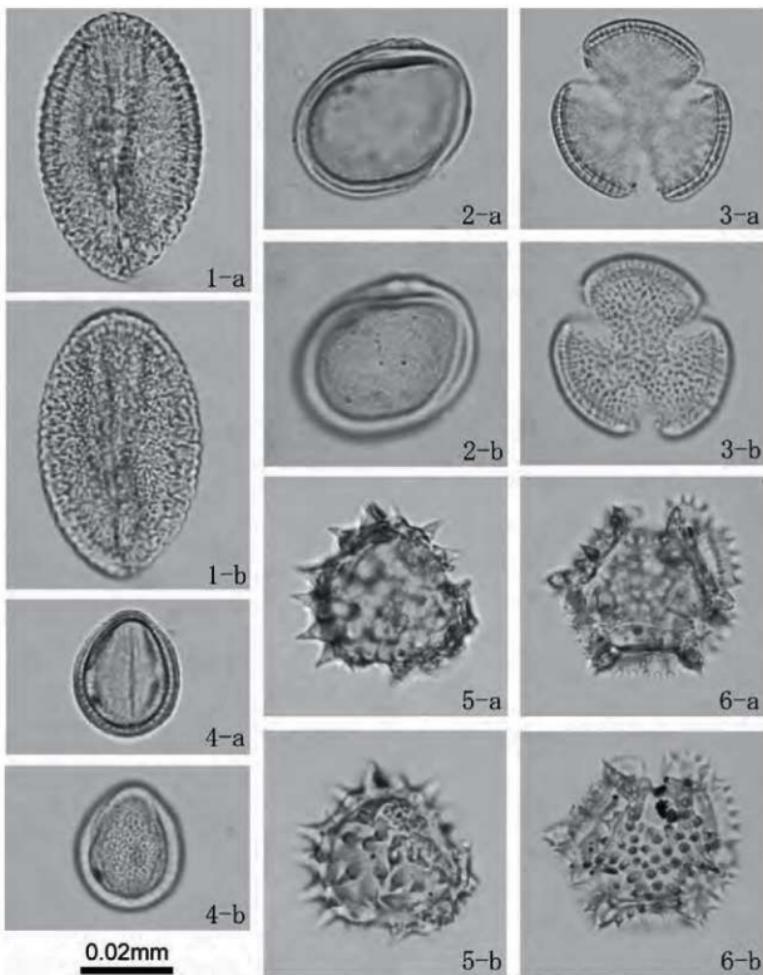


図1 館跡の花粉化石分布図

(草木花粉は孢子総数、草木花粉・孢子は花粉・孢子総数を基準として百分率で算出した)



図版 館城跡の花粉化石

1 : ゾバ属 PLC.SS 4729 SD 2

2 : イネ科 PLC.SS 4734 沢状地形

3 : キンボウゲ科 PLC.SS 4733 沢状地形

4 : ヨモギ属 PLC.SS 4731 SD 2

5 : 他のキク亜科 PLC.SS 4732 SD 2

6 : タンポポ亜科 PLC.SS 4730 SD 2

## 2. 城跡出土柵列木柱の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

### （1）はじめに

北海道の厚沢部町に所在する館城跡は、明治元年（1868）に築城され、同年の戦闘で焼失した城跡である。試料は館城跡外郭を構成する柵列として利用されていた木柱で、旧表土から約60～70cmに据えられていた。ここでは、柵列木柱3点の樹種同定を行い、利用された樹種の検討をした。

### （2）試料と方法

試料は調査区南西部のSA1で出土した木柱2点（No.1・2）、北東部のSA2で出土した木柱1点（No.3）の計3点である。いずれの試料も材の保存が悪く木取りは確認できなかった。しかし調査時の柱痕の形状では、3試料とも円柱であった可能性が高いと考えられている。試料は厚沢部町教育委員会によって一部採取され、同定を行った。

No.1・3の試料は、表面が薄く炭化していたが、内部は生であった。No.2は、全体的に炭化しており、生の部分はほとんど見受けられなかった。

そのためNo.1・3は、木材から片刃の剥刀を用いて材の横断面（木口）・接線断面（板目）・放射断面（柾目）の3断面を採取し、ガムクロラールで封入し永久プレバラートを作製した。同定はこれらのプレバラートを光学顕微鏡下で40～400倍で検鏡し、現生標本と対比して行った。

No.2は、炭化材の横断面（木口面）を手で割り実体顕微鏡で予察し、炭化材の横断面（木口）・接線断面（板目）・放射断面（柾目）を5mm位に整形したあと、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し試料を作製した。この後金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡で同定・撮影を行った。なおプレバラートおよび同定試料の残りは、厚沢部町教育委員会に保管されている。

### （3）結果

3点の同定の結果、広葉樹のニレ属が2点とカエデ属が1点産出した。

次に同定された材の特徴を記載し、光学顕微鏡・走査型電子顕微鏡写真を示す。

#### （1）ニレ属 *Ulmus* ニレ科 図版1 1a-1c (No.1)

年輪の始めに大きな道管が1列並び、晩材部では小径の道管が多数集合して斜線状に配列する環孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、2～6列である。

ニレ属にはハルニレやオヒヨウなどがあり、温帯に分布する落葉高木の広葉樹である。またハルニレは北海道に多い。ハルニレの材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

#### （2）カエデ属 *Acer* カエデ科 図版1 2a-2c (No.2)

中型の道管が単独ないし2～3個放射方向に複合し、横断面全体に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内腔にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、1～4列となる。

カエデ属にはイタヤカエデ、クロビイタヤなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられるが、北海道で多くみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。腐朽などに対する保存性は中庸である。

### （4）考察

同定の結果、南西部で出土した木柱2点はニレ属とカエデ属、北東部で出土した木柱1点はニレ属であった。ニレ属とカエデ属は、現生種では北海道の森林の一般的な構成樹木である（宮部・工藤、1986）。

ニレ属は南西部、東北部の両地区から出土した。カエデ属は、他の2試料よりも炭化の度合いが大きく、生材の部分は僅かであった。明治元年の戦闘で焼失した際に、被熱の度合いが異なって炭化してい

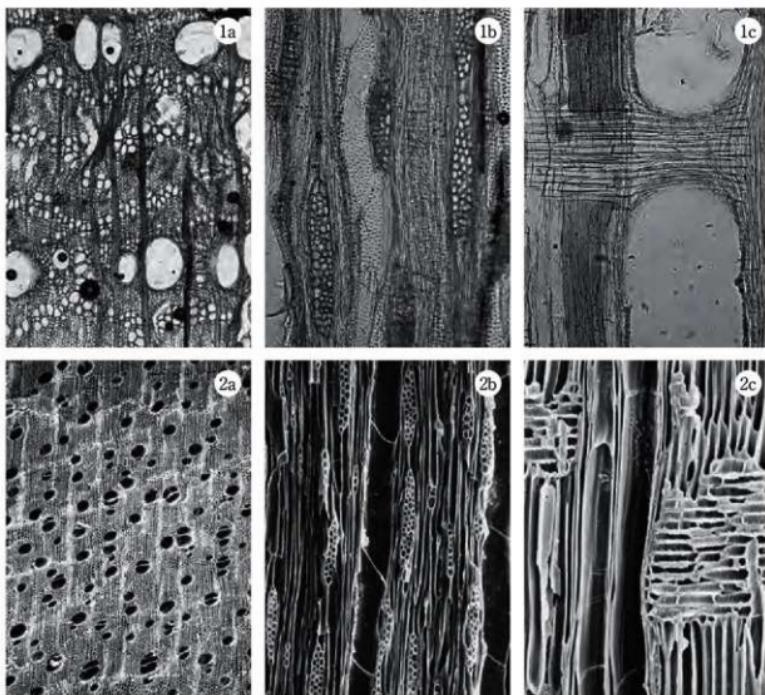
た可能性が考えられる。

#### 引用文献

宮部金吾・工藤祐瞬 (1986) 北海道主要樹木図譜. 186p. 北海道大学図書刊行会.

表1 館城跡出土柵列木柱の樹種同定結果

No.	出土地点	器種	本取り	樹種	試料の状態
1	SA1	木柱	芯持ち丸木?	ニレ属	表面炭化 内部生材
2	SA1	木柱	芯持ち丸木?	カエデ属	全面ぼか炭化
3	SA2	木柱	芯持ち丸木?	ニレ属	表面炭化 内部生材



図版1 館城跡出土柵列木柱の光学・走査型電子顕微鏡写真

1a-1cニレ属(No.1) 2a-2cカエデ属(No.2)

a:横断面(スケール=1:250μm・2:100μm) b:接線断面(スケール=1:100μm・2:25μm) c:放射断面(スケール=1:100μm・2:25μm)



試料採取位置図

# VI章 調査のまとめ

## 1. 館城跡北東部の堀・柵列について

今年度の調査は、平成元年に検出された堀・柵列の延長を確認することを目的として、館城跡北東部を広く掘削し、調査を行ったものである。

調査の結果、堀（SD2）は南へ屈曲した部分から約16mのところで途切れることができ確認され、その延長は確認できない。柵列（SA2）は、堀よりもさらに南へ及び、屈曲部から南へ約30mのところで西へ方向を変える。SA2の西端はそこから5mの地点で検出し、SA2西端の延長は確認できない。「伝米倉跡」西端土層断面（A-A'）で確認した「柱穴又は溝状の掘込み」については、SA2の延長である可能性も否定できないが、平面観察による確認ができなかったことから、現時点での判断は控えたい。

## 2. 「伝米倉跡」について

表土直下から炭化米及び被熱した陶磁器、金属製品、ガラス片を検出した。調査区域は「焼米のかたまりがいっぱい出た」（註1）ことから、地域住民によって「米倉跡」と伝承されてきた範囲の北半部分である。被熱した遺物とともに焼土、炭化層が検出され、釘、鍵等の建築材料が出土した。

「伝米倉跡」は、北側の旧耕作地とは約50cmの高低差があることが調査前の現況地形において確認できた。調査の結果、この高低差が、整地層と判断した厚さ約50cmの盛土により人为的に構築されたことが明らかになった。盛土（整地層）の最上面は固くしまったロームで構築され、土壌の選別や展圧などの手法により、堅密度の高い平坦面を造成したものである。先述のように釘、鍵等が出土しているが、整地層上面では、柱穴、礎石（抜取り痕）等、建物の所在を示す遺構は確認できない。

註1) 昭和63年1月22日城丘生活改善センターにおいて開催された「館城跡の想い出聴取」による。参加者は北嶋敏雄、松橋純吉、山畔作次郎)

## 3. 自然科学的分析の結果について

### (1) 花粉分析から推測する館城跡周辺の古環境について

館城跡北東部の堀底（SD2）から採取した試料（試料1）及び沢状地形の人为堆積層直下から採集した試料（試料2）により花粉分析を行った。いずれも第2調査区採取の試料である。試料1については館城落城直後の古環境、試料2については館城築城以前の古環境を明らかにすることを目的として分析を実施したものである。

V章に掲載した分析結果を要約すると以下のとおりとなる。

- ①樹木花粉の検出数が少なく、保存状態も悪い。
- ②コナラ属コナラ亜属が最も多く、ハンノキ属、ブナ属、カバノキ属などがこれに次いで多く検出されることから、館城周辺では落葉広葉樹林が成立していた可能性が高い。
- ③草本では、イネ科、ヨモギ属、シダ植物が目立ち、SD2周辺ではタンボボ亜科、沢状地形周辺ではキンポウゲ科やセリ科が確認された。
- ④1個体ずつであるがソバ属が検出されていることから、試料採取地点周辺でソバが栽培されていた可能性がある。

①については、今年度の試料採取地点はいずれも地下水位より上位であったことから、試料採取層位

の影響を受けた可能性がある。

②については、平成19年度にも堀底の土壤を採取して花粉分析を実施しているが、西辺の堀底採取の試料による分析結果では、「コナラ亜属やカバノキ属、ニレ属—ケヤキ属、ブナ、カエデ属、トチノキ属などが生育する落葉広葉樹林が成立していた」とされている。今回の分析結果についても、平成19年度の分析結果と同様に、館城周辺における落葉広葉樹林の存在が推測される結果となっている。

③については、平成19年度の分析結果においても、イネ科、カヤツリグサ科、イタドリ節、カラマツソウ属、ヨモギ属、タンボボ亜科、シダ植物などの雑草群落が存在した可能性が推定されており、これとよく似た結果である。

④については、ソバ属の花粉は遠方まで飛散しないとされることから、館城周辺でソバの栽培が行われていた可能性が高い。ただし、SD2採取の試料については、あくまでも館城落城後に形成された土壤中から採取したものであること、沢状地形採取の試料についても、形成時期を特定できないことから、ソバ属花粉が検出されたことの評価については、今後の分析結果を踏まえて慎重に判断する必要がある。

## (2) 櫛列出土の木材の樹種同定結果について

No.1、2は館跡南西部の櫛列（SA1）、No.3は東部の櫛列（SA2）で検出し、採取したものである。

分析結果はNo.1、No.3 がニレ属、No.2がカエデ属である。これららの樹種は「現植生では北海道の森林の一般的な構成樹木」とされ、今年度実施した花粉分析においても両樹種の花粉が確認されていることから、館城周辺にも生育していたと考えられる。

厚沢部町周辺に生育するニレ属には、ハルニレとオヒヨウニレがある。木材として一般的なのはハルニレで、「年輪ははっきりとしている」ことから、家具などに多く用いられる（須藤1994）。

カエデ属はイタヤカエデが厚沢部町周辺に主に生育し、木材としても「イタヤカエデが代表的」とされる。「木理は不規則なことが多く、そのために、美しい空をもつことが多い」とされることから、家具などの用途に用いられる（須藤前掲）。

今回分析を行った柱材はいずれも広葉樹で、現在では建築材料としては用いられることの少ない樹種である。どちらかと言えば、木目の美しさを活かして、家具や化粧材として使われることが多い。昭和63年の発掘調査においても櫛列に使用された柱材が検出されており、檜山森林管理署職員の肉眼観察により、「ナラ、セン」と鑑定されている（厚沢部町教育委員会1991）。科学的な手法による樹種同定有待があるが、広葉樹であることは間違いないだろう。

平成19年度の調査で南西部の堀底から出土した半截木材についてはエノキ属と同定されている。北海道に生育するエノキ属のエゾエノキは、家具材として用いられることが多く、建築材として一般的でないことから、「櫛列の部材の可能性は低い」と判断したが、今回の樹種同定により、櫛列に用いられたことが確実な柱材が必ずしも建築材として一般的ではない樹種であったことから、上記の判断についても保留が必要であろう。

# 参考文献

## <引用文献>

### I章

- 厚沢部町教育委員会 1965 「あっさぶの鹿子舞」  
厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所 1989 「館城趾 遺構確認調査報告書」  
厚沢部町教育委員会 1991 「館城趾 遺構・範囲確認調査 = 第2、3次発掘調査報告書 =」  
厚沢部町教育委員会 2007 「館城跡Ⅲ 平成17・18年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書」  
厚沢部町教育委員会 2008 「館城跡Ⅳ 平成19年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書」

### II章

- 厚沢部町史編纂委員会 1969 「櫻島 - 厚沢部町の歩み -」  
江差町史編集室 1979 「江差町史」第三巻史料三 江差町  
江差町史編集室 1981 「江差町史」第四巻史料四（閑川家文書） 江差町  
江差町史編集室 1983 「江差町史」第六巻通説二 江差町  
大友喜作編 1972 「北門叢書1」第1冊 国書刊行会  
菊池明 1998 「南柯紀行・北国戦争概略衝鋒隊之記」新人物往来社  
工業技術院地質調査所 1975 「地域地質研究報告 航地域の地質」  
永田富智 1991 「北門史綱（前承-卷之四より卷之七）」「松前藩と松前-松前町史研究紀要-」 松前町史編集室  
北海道 1969 「新北海道史」 第七巻 資料一  
北海道開発庁 1970 「5万分の1 地質図幅説明書 江差」  
北海道庁 1936 「新撰北海道史 第五巻」(1991「新撰北海道史 第五巻」清文堂出版株式会社 復刻版を参照)  
吉田武三 1970 「三航蝦夷日誌」上巻 吉川弘文館

### III章

- 厚沢部町教育委員会・十勝考古学研究所 1989 「館城趾 遺構確認調査報告書」

### IV章

- 北海道教育委員会 1964 「文化財調査概要報告書」  
大場利夫 1969 「北海道檜山郡厚沢部城址」『日本考古学年報17（昭和39年度）』日本考古学協会

### V章

\* 章末に記載

### VI章

- 須藤彰司 1994 「世界の木材の色々」『木材活用辞典』木材活用辞典編集委員会 産業調査会辞典出版センター

<その他の参考文献>

- 大橋康二 1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー 55 ニュー・サイエンス社
- 大橋康二 1994『古伊万里の文様』理工学社
- 大橋康二 2004『世界をリードした磁器窯 肥前窯』シリーズ「遺跡を学ぶ」005 新泉社
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念誌－』
- 財团法人 潤戸市埋蔵文化財センター 2002『財团法人 潤戸市埋蔵文化財センター企画展図録 江戸時代の瀬戸窯』
- 財团法人 潤戸市埋蔵文化財センター 2004『財团法人 潤戸市埋蔵文化財センター企画展図録 江戸時代の瀬戸・美濃窯』
- 兩館市教育委員会 2006『特別史跡五稜郭跡箱館奉行所跡発掘調査報告書』
- 波佐見町教育委員会 1993『波佐見町内古窯跡群調査報告書』波佐見町文化財調査報告書第4集
- 波佐見町教育委員会 2006『大新登窯跡』波佐見町文化財調査報告書第17集
- 財团法人北海道埋蔵文化財センター 1984『史跡松前藩戸切地陣屋跡－昭和58年度発掘調査概要報告－』上磯町教育委員会
- 北海道文化財保護協会 1985『史跡松前藩戸切地陣屋跡－昭和59年度発掘調査概要報告－』上磯町教育委員会
- 北海道文化財保護協会 1986『史跡松前藩戸切地陣屋跡－昭和60年度発掘調査概要報告－』上磯町教育委員会
- 松前町教育委員会 2005『東山遺跡』



## 写 真 図 版





写真1 館城跡周辺航空写真（昭和51年国土地理院撮影）

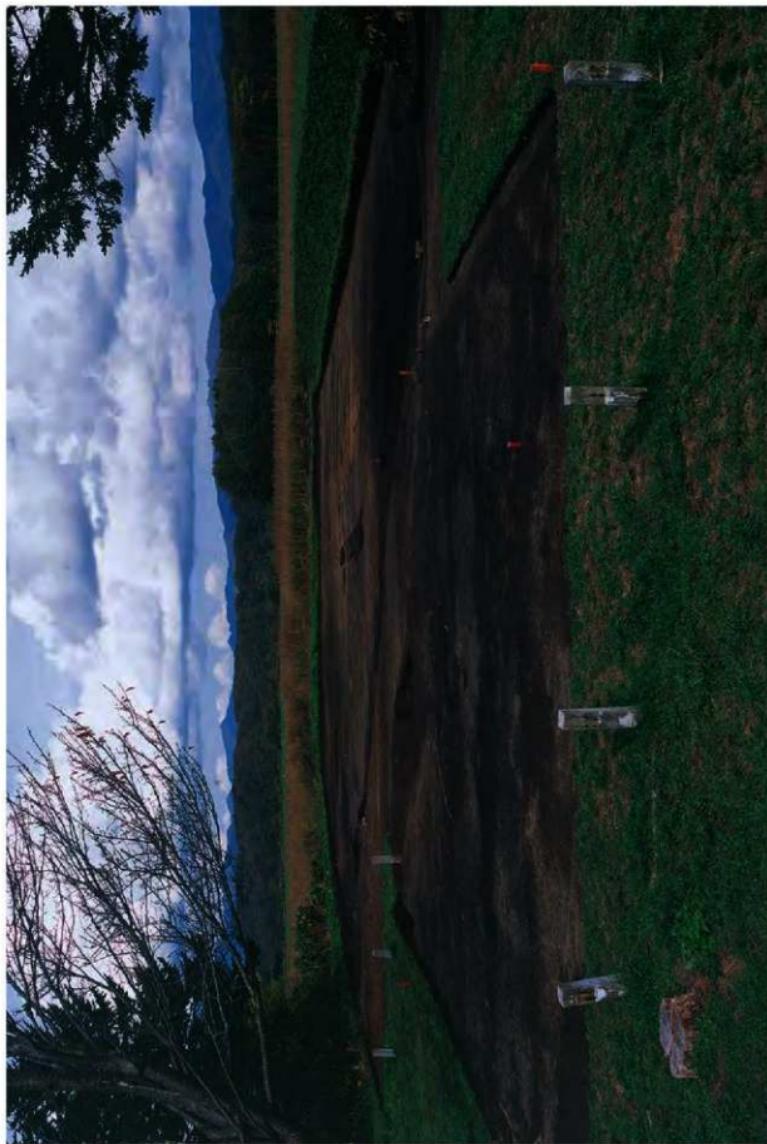


写真2 第2調査区全景（南から）



写真3 重機による表土掘削状況（南から）



写真4 重機による表土掘削状況（南から）

写真図版 4



写真5 SA2 及び SD3 検出状況（南から）



写真6 「伝米倉跡」表土掘削状況（東から）



写真7 SD2 完掘状況全景（南から）



写真8 SD2 南端部完掘状況（南から）



写真9 SD2 屈曲部断面（南から）



写真10 SD2屈曲部完掘状況（西から）



写真11 SA2西端部完掘状況（東から）

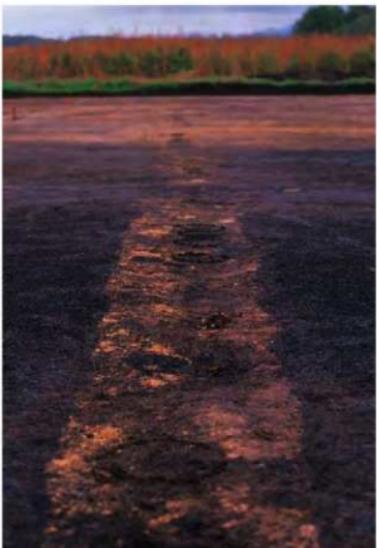


写真12 SA2柱痕検出状況（南から）



写真13 SA2断面（南から）



写真14 SA2断面の柱痕検出状況（南から）



写真15 SD2及びUSA2全景（南から）



写真16 「雲米倉路」全景（北東から）



写真17 「伝米倉跡」焼土検出状況（南から）



写真18 炭化米出土状況（北東から）



写真19 「伝米倉跡」調査状況（北から）



写真20 「伝米倉跡」西端断面とSA2（西から）

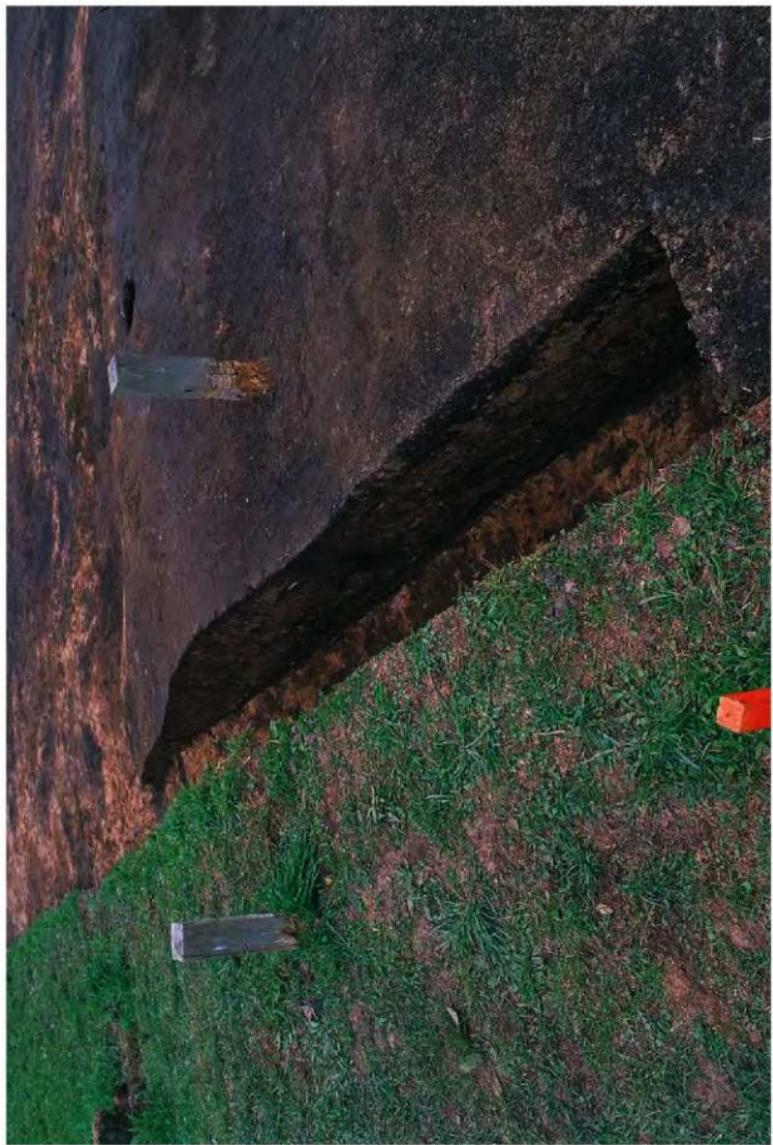


写真21 「伝米倉跡」西端断面（南西から）



写真22 「伝米倉跡」東端断面（南西から）

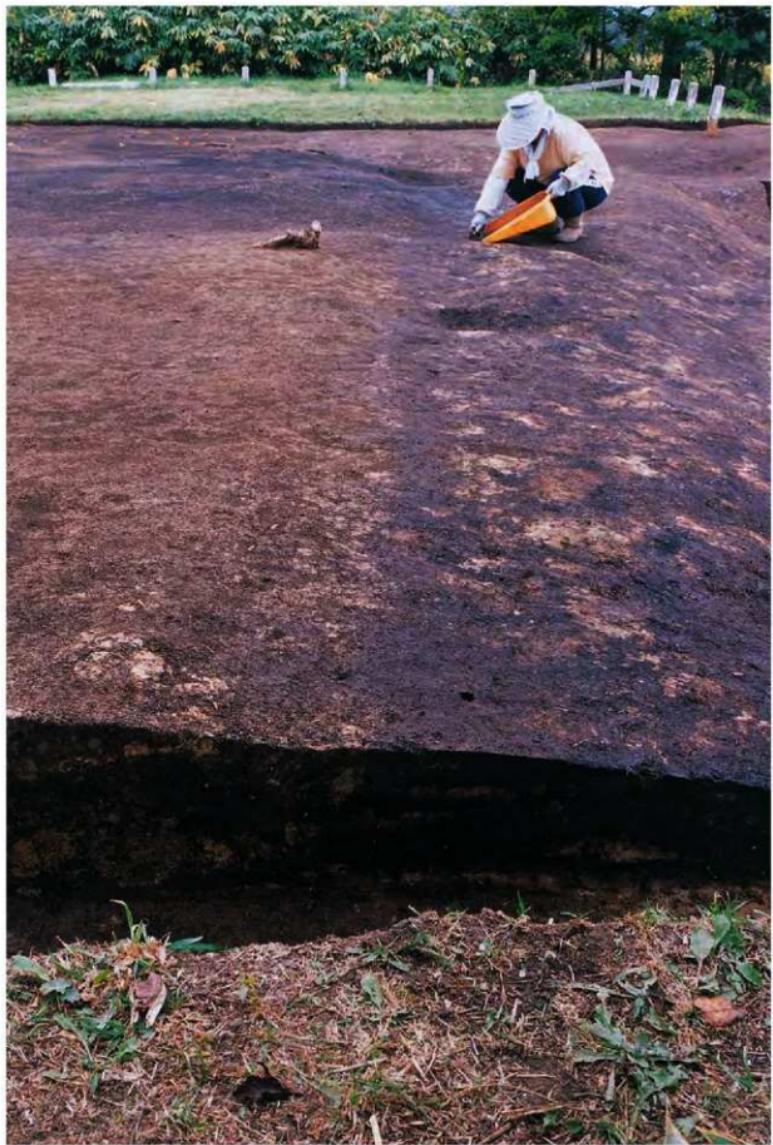


写真23 「伝米倉跡」東端断面（東から）



写真24 沢状地形検出状況（南東から）



写真25 沢状地形断面（南東から）

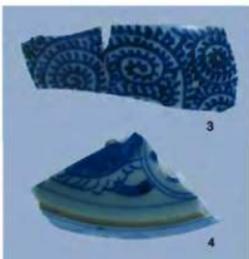
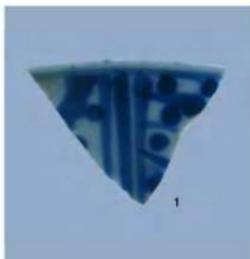


写真26 表採・包含層出土陶磁器（碗・瓶）

写真27 「伝米倉跡」出土陶磁器（碗・鉢蓋）



写真28 「伝米倉跡」出土陶磁器（土瓶・土鍋蓋）



写真29 「伝米倉跡」出土陶磁器（甕）



写真30 「伝米倉跡」出土金属製品（釘）



写真31 「伝米倉跡」出土金属製品（鉢）



写真32 「伝米倉跡」出土銭貨



写真33 沢状地形出土陶磁器（左：近世磁器、右：近代磁器）



写真34 沢状地形出土遺物（碗、ガラス瓶）

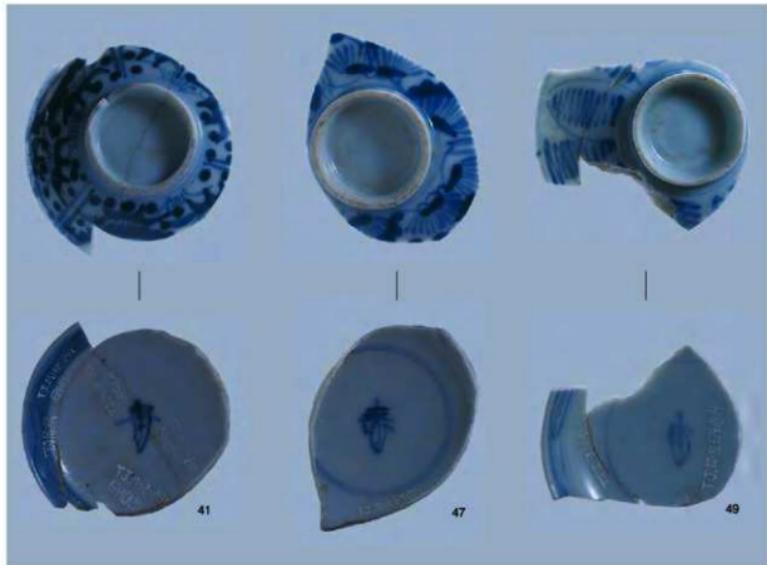


写真35 昭和39年出土陶磁器（碗蓋）



写真36 昭和39年出土陶磁器（碗蓋）



写真37 昭和39年出土陶磁器（碗蓋）



写真38 昭和39年出土陶磁器（碗）



写真39 昭和39年出土陶磁器（碗・皿）

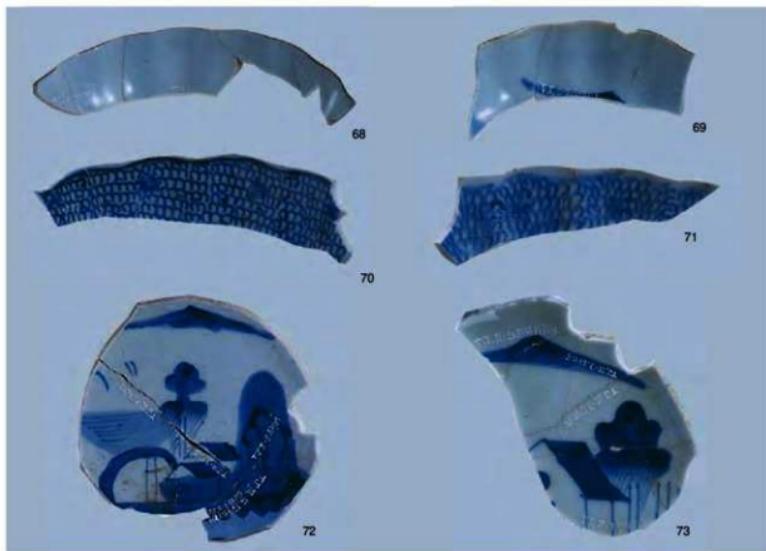


写真40 昭和39年出土陶磁器（皿）

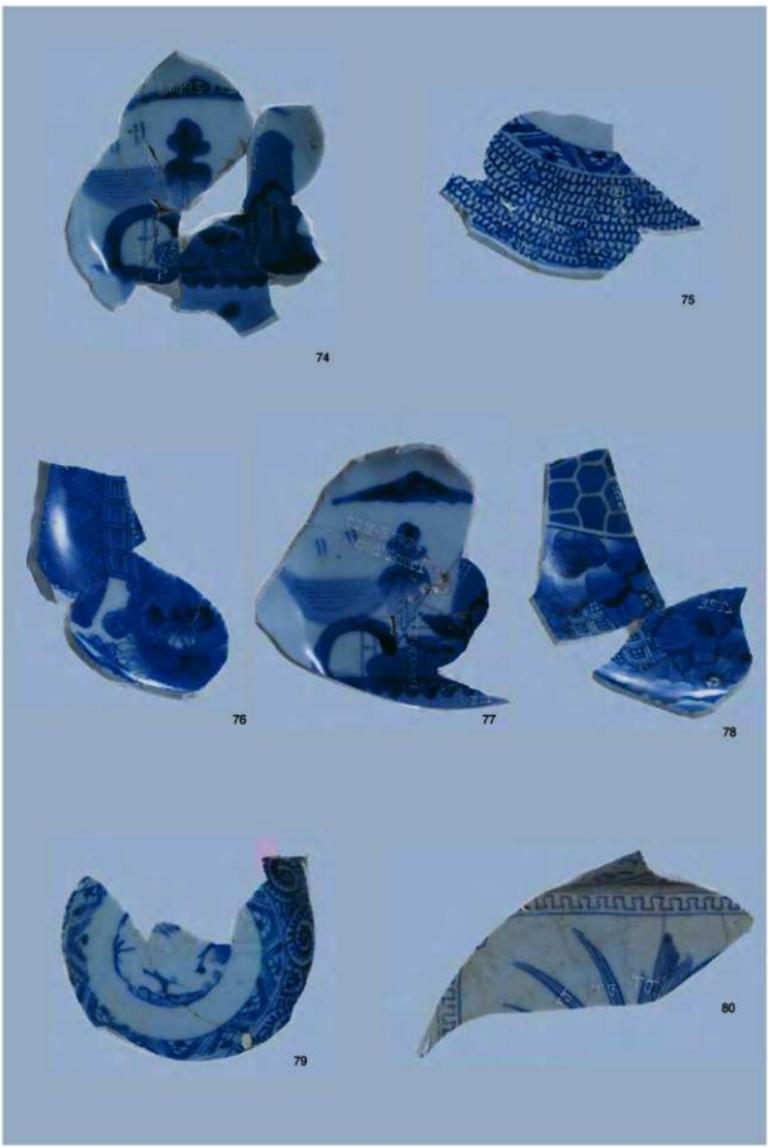


写真41 昭和39年出土陶磁器 (Ⅲ)



写真42 昭和39年出土陶磁器（皿・鉢）

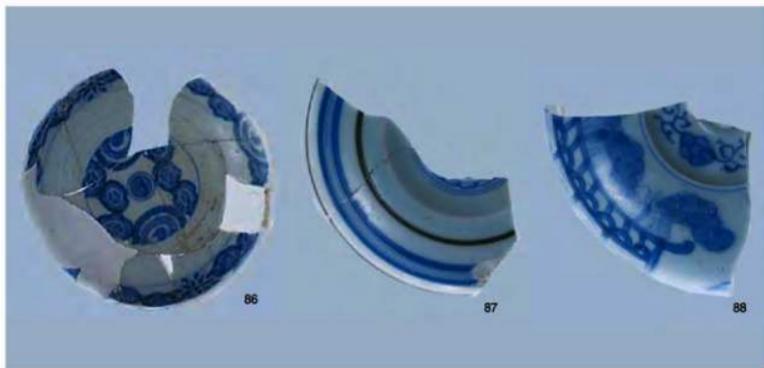


写真43 昭和39年出土陶磁器（合子蓋・鉢蓋）



写真44 昭和39年出土陶磁器（レンゲ）

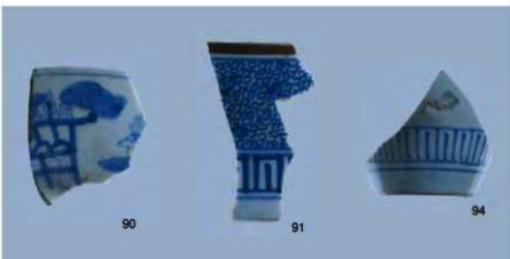


写真45 昭和39年出土陶磁器（蓋付鉢、段重、瓶）



写真46 昭和39年出土陶磁器（段重）

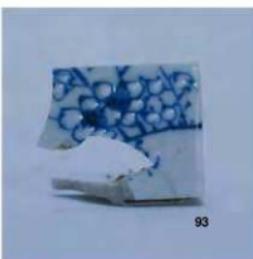


写真47 昭和39年出土陶磁器（香炉）



写真48 昭和39年出土陶磁器（瓶）



写真49 昭和39年出土陶磁器（碗）



写真50 昭和39年出土陶磁器（急須蓋）

写真51 昭和39年出土陶磁器（急須）

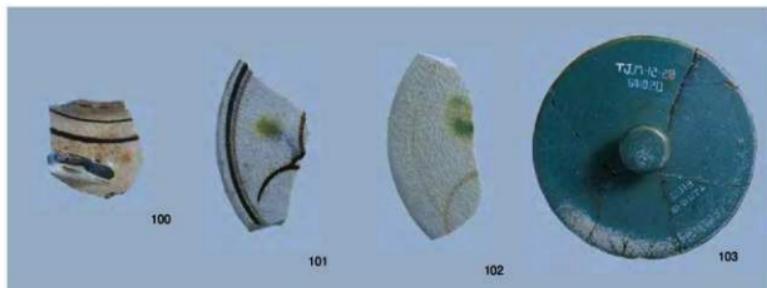


写真52 昭和39年出土陶磁器（土瓶・土瓶蓋）



写真53 昭和39年出土陶磁器（土瓶）



写真54 昭和39年出土陶磁器（油柱・網）



写真55 昭和39年出土陶磁器（灯明皿）



写真56 昭和39年出土陶磁器（瓶）



写真58 昭和39年出土陶磁器（すり鉢）



写真59 昭和39年出土陶磁器（すり鉢）





写真60 昭和39年出土陶磁器（甌）



写真61 昭和39年出土石製品（砥石）



写真59 昭和39年出土陶磁器（すり鉢）



写真62 昭和39年出土陶磁器（甕）



写真63 昭和39年出土陶磁器（甕）

## 報告書抄録

ふりがな	しせきまつまえししろあと ふくやまじょうあと たてじょうあと たてじょうあと							
書名	史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡 館城跡V							
副書名	平成20年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	厚沢部町教育委員会発掘調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	石井淳平							
編集機関	厚沢部町教育委員会							
所在地	〒042-1113 北海道檜山郡厚沢部町新町234-1							
発行年月日	2009年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
館城跡	北海道檜山郡厚沢部町字城丘158ほか	1363	C-03-14	41°52'36"	140°20'46"	20080818 ~ 20081030	1329m <sup>2</sup>	埋蔵文化財緊急調査事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
館城跡	城跡	幕末	堀、櫓列、整地層 焼土	陶磁器、金属製品				

厚沢部町教育委員会発掘調査報告書第7集  
史跡松前氏城跡 福山城跡 館城跡 館城跡V  
平成20年度町内遺跡発掘調査事業に伴う発掘調査報告書

平成21（2009）年3月31日  
編集・発行 厚沢部町教育委員会  
〒043-1111 北海道檜山郡厚沢部町新町234番地の1  
TEL (0139) 64-3311  
FAX (0139) 64-3822  
印 刷 桑長門出版社 印刷部  
〒040-0022 南館市日乃出町11番13号  
TEL (0138) 52-2461  
FAX (0138) 53-2340